1870 1960

レーニン主義万歳

レーニン主義万歳

外文出版社
北京

ウラジーミル・イリツチ・レーニン

目　　次

レーニン主義万歳 ……紅旗雑誌編集部 … 1

偉大なレーニンの道に沿つて前進せよ……人民日報編集部 … 60

レーニンの革命の旗の下に団結せよ ……陸 定 一 … 92

レーニン主義万歳

レーニン生誕九十周年を記念して

紅旗雑誌編集部

一

今年の4月22日はレーニン生誕九十周年にあたる。

レーニンが誕生した翌年、すなわち1871年には、英雄的なパリ・コンミユンの蜂起がおこつた。パリ・コンミユンは画期的な偉大な革命であり、プロレタリアートが資本主義制度をくつがえそうとした全世界的意義をもつ最初の演習であつた。コンミユンがベルサイユの反革命の攻撃をうけて、失敗に瀕したとき、マルクスは「**コンミユンがやられても、闘争は延期されただけのことである。コンミユンの原則は永久に存在し、滅ぼすことのできないものである。労働者階級が解放をかちとるまでは、これらの原則が一再ならずあらわれるであろう。**」①と語つた。

コンミユンの最も主要な原則とはなにか？　マルクスののべたところによれば、それはつまり、労働者階級はただ簡単に出来あいの国家機関をにぎり、それを使つて自己の目的を達するようなことはできないということである。いいかえると、プロレタリアートは革命的手段をもつて権力を奪取し、ブルジョアジーの軍事・官僚機関を粉砕し、プロレタリアート独裁を樹立して、ブルジョア独裁にとつてかわらせなければなら

---

① 「マルクスのパリ・コンミユンについての演説」

ぬ。プロレタリアートの闘争史に通じている人びとならみな知つているように、ほかでもなくこの根本的な問題において、マルクス主義者と日和見主義者、修正主義者との分水嶺が形成されたのであり、そしてマルクス・エンゲルスが逝去したのちには、ほかならぬレーニンがコンミユンの原則をまもるため日和見主義者、修正主義者とまつたく妥協のないたたかいをすすめたのである。

パリ・コンミユンがなしとげえなかつた事業は、46年を経て、レーニンが直接に指導した偉大な十月革命のなかで、ついに勝利をおさめた。ロシアにおけるソビエトの経験はパリ・コンミユンの経験の継続であり、発展であつた。マルクス、エンゲルスがたえず明らかにし、レーニンがロシア革命の新しい経験にもとづいて充実させたコンミユンの原則は、まず最初に、地球の六分の一の土地において生きた事実となつた。コンミユンの原則は永久に存在し、滅ぼすことのできないものであるといつたマルクスの言葉は、まつたく正しかつた。

帝国主義の狼どもは、あたらしく生まれたソビエト国家をしめ殺そうと企図し、当時のロシアの反革命勢力と連合して、武力干渉をおこなつた。だが、英雄的なロシアの労働者階級とソ連の各民族人民は、これら外来の強盗どもを駆逐し、国内の反革命の叛乱を絶滅して、世界最初の偉大な社会主義共和国をうちかためた。

レーニンの旗のもと、十月革命の旗のもとに、プロレタリア革命を基調とする新しい世界革命が開始され、人類の歴史の新しい紀元がはじまつた。

十月革命によつて、レーニンの声は急速に全世界へつたわつていつた。1919年の中国人民の反帝反封建の「五・四」運動は、まさしく毛沢東同志ののべているように、**「当時の世界革命の呼びかけのもとで、ロシア革命の呼びかけのもとで、またレーニンの呼びかけのもとで、おこつた」**①のである。

レーニンの呼びかけが力強いのは、それが正しいからである。帝国主義時代という歴史的条件のもとで、レーニンはプロレタリア革命とプロレタリアート独裁についての争う余地のない一連の真理をしめした。

レーニンは、少数の資本主義強国の金融寡頭、すなわち帝国主義者は、自国で人民大衆を搾取しているばかりでなく、全世界を圧迫し略奪し、世界の大多数の国をかれらの植民地、従属国にかえていると指摘した。帝国主義戦争は帝国主義政策の継続である。世界大戦は、貪婪あくことなき帝国主義者によつて世界の市場、原料産地および投資範囲の争奪のため、世界の再分割のためにひきおこされたものにほかならない。世界にまだ資本主義的帝国主義が存在するかぎり、戦争の根源はやはり存在するし、戦争の可能性もやはり存在する。プロレタリアートは、人民大衆をみちびいて戦争の根源をさとらせ、平和をかちとり、帝国主義に反対するためにたたかわせなければならない。

帝国主義は独占的な、寄生的または腐れはてた、瀕死の資本主義であり、資本主義発展の最後の段階であり、したがつてプロレタリア革命の前夜である、とレーニンは断言した。プロレタリアートの解放を実現するには、絶対に改良主義の道を通つてはならず、革命の道をとおるほかはない。資本主義国のプロレタリア解放運動は、植民地、従属国の民族解放運動と同盟をむすばなければならない。この同盟は、帝国主義者と植民地、従属国の封建的・買弁的反動勢力との同盟を粉砕することができ、したがつて全世界における帝国主義制度の最後的終結を不可避的なものにする。

資本主義の経済的、政治的発展の不均衡という法則にもとづいて、レ

① 「新民主主義論」

ーニンはつぎのような結論をえた。つまり、資本主義の発展が各国できわめて不均衡であるため、社会主義はまず一国もしくはいくつかの国において勝利をおさめ、すべての国で同時に勝利をおさめることはできない。それゆえ社会主義が一国もしくはいくつかの国で勝利をおさめたとしても、他に資本主義国がなお存在するのであつて、このことはたんに磨擦をひきおこすばかりでなく、社会主義国をくつがえそうとする帝国主義の活動をもひきおこすこととなる。したがつて、闘争は長期にわたる。社会主義と資本主義との闘争は、ひとつの歴史的時代ぜんたいを包括することになろう。社会主義国は、つねに帝国主義による侵略・襲撃の危険を警戒し、全力をつくしてこうした危険を防止すべきである、と。

あらゆる革命の根本問題は、国家権力の問題にほかならない。レーニンは、プロレタリア革命の根本問題がプロレタリアート独裁の問題にほかならぬことを、詳細かつ徹底的に論じた。革命的手段によつてブルジョア独裁の国家機関を粉砕してうちたてられるプロレタリアート独裁は、プロレタリアートと農民、その他のあらゆる勤労者の特殊な同盟であり、あらたな条件のもとにおける階級闘争のちがつた形での継続であり、搾取階級の反抗を鎮圧し、外部からの侵略に抵抗するためのものであり、ふるい社会の勢力とその伝統に反対するねばりづよい闘争であつて、その闘争は血を流したり流さなかつたり、暴力的であつたり平和的であつたり、軍事的であつたり経済的であつたり、教育的であつたり行政的であつたりする。プロレタリアート独裁なしに、またプロレタリアート独裁がこれらの戦線で十分に勤労大衆を起ちあがらせて、これらの不可避の闘争をねばりづよく継続的にすすめることなしには、社会主義などはありえないし、社会主義の勝利などはありえない。

レーニンはつぎのように見なした。プロレタリア革命を実現し、プロレタリアート独裁を実現、強化するうえでもつとも重要なことは、プロレタリアートが自己の真に革命的な、日和見主義と完全に袂をわかつた政党、つまり共産党をうちたてることである。この政党はマルクス主義の弁証法的唯物論と史的唯物論の理論で武装されねばならない。この政党の綱領はプロレタリアートと抑圧されているすべての勤労大衆とを組織して階級闘争をすすめ、プロレタリアートの支配をうちたて、社会主義を経て共産主義という最終目的に達することである。この政党は大衆と一体となり、大衆の歴史的な創造的精神を重視しなければならない。革命をすすめるさいには、党はしつかりと大衆に依拠せねばならないし、社会主義、共産主義の建設をすすめるさいにも、党はおなじくしつかりと大衆に依拠しなければならない、と。

これらの真理は、十月革命の前後に、レーニンによつてたえず示されたものである。当時、世界の反動派と俗物どもは、レーニンによつて示されたこれらの真理をおそろしいものと見なした。だが、これらの真理が世界の実生活のなかでつぎつぎに勝利しているのをわれわれは見ているのである。

十月革命から現在までのこの四十年あまりのあいだに、世界には新しい大きな変化が生じた。

社会主義、共産主義建設の偉大な成果によつて、ソ連はもとの帝制ロシアの時代の経済的、技術的にひじように立ちおくれていた国を、世界一流のもつとも先進的な技術を擁する国にかえた。ソ連は経済上、技術上での飛躍によつてヨーロツパの資本主義国をはるか後方にひき離したばかりでなく、技術上ではまたアメリカをもひきはなしてしまつた。

ソ連を主力軍とする反ファシズム戦争の偉大な勝利は、中欧と東欧における帝国主義の鎖をつき破つた。中国の人民革命の偉大な勝利は、中国大陸における帝国主義の鎖をつき破つた。一群の新しい社会主義国が

誕生した。ソ連を先頭とする全社会主義陣営は地球ぜんたいの四分の一の土地をもち、人口ではすでに世界の総人口の三分の一以上を占めている。いま社会主義陣営はすでに独立した世界経済体制を形成し、資本主義の世界経済体制と対立している。社会主義諸国の工業生産総額は、いまではすでに全世界の工業生産総額の40パーセント近くを占めており、遠からず資本主義諸国の工業生産総額をしのぐことになろう。

帝国主義の植民地体制は瓦解し、さらにまたいつそうの瓦解をしめしつつある。闘争はもちろん曲折したものであるが、全般的にいつて、民族解放運動の嵐はいまやアジア、アフリカおよびラテン・アメリカをいよいよ広はんに席巻している。事物の発展はその逆の方向へむかいつつある。すなわち、そこでは帝国主義者はいまやしだいに強者から弱者にかわり、一方そこの人民はしだいに弱者から強者にかわりつつある。

第一次大戦後にいちど存在した資本主義の相対的安定の局面はとつくに終りをつげた。第二次大戦後には社会主義の世界経済体制が形成されたことによつて、資本主義の世界市場はいぜんよりはるかにせばまつた。資本主義社会の生産力と生産関係の矛盾はいぜんよりもさらに尖鋭化した。資本主義の周期的な経済危機は、いぜんのように十年前後に一回発生するのではなくて、ほとんど三、四年に一回発生している。最近、アメリカのブルジョアジーの一部の代表的人物は、アメリカが十年内に三回「経済後退」にみまわれたことをみとめており、かつまた、1957——1958年の「経済後退」を経過したばかりなのに、いままた新しい「経済後退」の再来を感じているのである。資本主義の経済危機の周期が短くなつたというのは新しい現象であり、それは世界の資本主義制度がいよいよその不可避的な滅亡に近づいていることを一段としめしているのである。

資本主義諸国の発展の不均衡はいぜんよりもさらにひどくなつている。帝国主義の地盤はますますせばまり、互いに角をつきあわせており、アメリカ帝国主義はいま、イギリス、フランスその他の帝国主義の手中から、かれらが以前にもつていた市場と勢力範囲をたえず奪取している。アメリカを頭とする帝国主義諸国は、十数年らい、ひたすら軍備の拡張と戦争準備をすすめており、第二次大戦で敗北した西ドイツと日本の両国の軍国主義はかれらのもとの敵であるアメリカ帝国主義者の助けをえてまたもや再起した。この二つの帝国主義がとびだしてきて資本主義的世界市場の争奪にくわわり、いまやかれらの「伝統的な友誼」をふたたびさかんにわめきたてて、いわゆる「ワシントンを起点とするボン——東京枢軸」なる新しい活動をおこないつつある。西ドイツ帝国主義はすでに何はばかるところなく、国外に軍事基地を物色している。かくて、帝国主義内部の烈しい衝突は激化し、同時に社会主義陣営と平和を愛するすべての国にたいする脅威も増大した。現在の状況は、第一次大戦後米英帝国主義者がドイツ軍国主義の再起を助けたのとよく似ており、結果はやはりかれらが「石をもちあげて自分の脚を打つ」ことになるだろう。アメリカ帝国主義者は、第二次大戦後に、世界の緊張した情勢をかもしだしたが、このことはその強大さをしめすものではなくて、その弱さをしめすものであり、これこそ資本主義制度のかつてない不安定さを反映するものなのである。

アメリカ帝国主義者は、世界制覇というその野心を実現するため、かねてから虎視眈々と社会主義国にたいしてさまざまな破壊活動と転覆活動をすすめているばかりでなく、「共産主義による脅威」に反対するということを口実に、各国の革命を弾圧する世界の憲兵をもつて自認し、世界のいたるところに軍事基地を設け、中間地帯を奪取し、軍事挑発をおこなつている。ねずみが道を走れば誰もがみなどなつてなぐりつけるように、アメリカ帝国主義者はいたるところでさんざんな目にあい、い

たるところで逆に人民の革命闘争の新しい高まりを激発させている。いまでは、かれら自身でさえも、ソ連を先頭とする社会主義世界がますます栄えている姿にくらべて、「世界の大国としてのアメリカの影響は弱まりつつある」ことを感じている。かれらのところでは「ただ古代ローマの衰亡期しか見られない」のである。

四十余年らいの世界の変化は、まさしく、帝国主義は日一日と腐れはて、社会主義は日一日とよくなっているのである。われわれがいま直面しているのは偉大な新しい時代であつて、この新しい時代の主な特徴は、社会主義の力が帝国主義の力をしのぎ、世界各国の人民のめざめた力が反動の力をしのいでいることである。

現在の世界情勢は、レーニンが世にあつた時期にくらべて大きな変化をとげていることは明らかであるが、これらのいつさいの変化は、レーニン主義がすでに時代おくれになったことを証明するのではなくて、それとはまつたく反対に、レーニンのしめした真理をいよいよ鮮明に実証しており、レーニンが革命的マルクス主義を防衛し、マルクス主義を発展させる闘争のなかで提起したすべての学説をいよいよ鮮明に実証しているのである。

レーニンは、帝国主義とプロレタリア革命の時代という歴史的条件のもとで、マルクス主義を新しい段階におしすすめ、抑圧されているすべての階級と抑圧されているすべての人民に、真に資本主義的帝国主義による奴隷化の状態から脱し、貧困から脱することのできる道をはつきりとさし示した。

この四十年はレーニン主義が世界で勝利をおさめた四十年であり、レーニン主義が世界でますます人びとの心に深くしみ込んだ四十年である。レーニン主義は社会主義制度をうちたてた諸国で偉大な勝利をおさめ、またひきつづきおさめているばかりでなく、抑圧されているすべての人民の闘争のなかでもたえず新しい勝利をおさめている。

レーニン主義の勝利は全世界の人民から歓呼して迎えられたが、同時にまた、そのためにこそ帝国主義者とすべての反動派の敵視をまねかないわけにはいかなかつた。帝国主義者は、レーニン主義の影響を弱め、人民大衆の革命的意志を麻痺させるため、レーニン主義にたいして最も野蛮な、最も卑劣な攻撃と中傷をくわえ、さらにまた、労働運動の内部から動揺分子と裏切り者を買収、利用し、かれらに指図してレーニンの学説にたいする歪曲と骨抜きをやらせた。十九世紀の末、マルクス主義がさまざまな反マルクス主義の思潮をたたきつぶし、労働運動のなかにひろく伝播して支配的地位を獲得したとき、ベルンシユタインを代表者とする修正主義者は、ブルジョアジーの需要にこたえて、マルクス学説にたいする修正を提起した。現在、レーニン主義が世界の労働者階級、すべての抑圧されている階級と抑圧されている民族をみちびいて帝国主義とさまざまな反動派にむかつて進軍し、偉大な勝利をおさめているとき、チトーを代表者とする現代修正主義者は、帝国主義者の需要にこたえて、レーニン学説（すなわち現代のマルクス学説）にたいする修正を提起した。まさに1957年11月、モスクワでひらかれた社会主義国の共産党・労働者党代表者会議の宣言にのべられているとおり、「**ブルジョア的影響の存在は修正主義の国内的根源であり、帝国主義の圧力に屈服することは修正主義の国外的根源である。**」ふるい修正主義者は当時マルクス主義がすでに時代おくれになつたことを証明しようと企図したが、現代修正主義はレーニン主義がすでに時代おくれになつたことを証明しようと企図しているのである。モスクワ会議の宣言は、「**現代修正主義は、マルクス・レーニン主義の偉大な学説をけなそうとし、マルクス・レーニン主義を『時代おくれ』だといい、いまでは社会発展にたいする意義を失つたかのようだと稱している。修正主義者はマルクス主義の革命**

的な魂を腐蝕させ、労働者階級および勤労大衆の間で社会主義にたいする確信をうちこわそうとやつきになつている。」とのべている。宣言のこの一節は、ひじように正しいものであり、状況はまさにそうなのである。

マルクス・レーニン主義の学説は、現在では「時代おくれ」になつているかどうか？　帝国主義について、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁について、戦争と平和について、社会主義と共産主義の樹立についてのレーニンの完璧な全学説はいまなおそのあふれるばかりの生命力を保持しているかどうか？　もしもそれがいまなお有効であり、いまなおあふれるばかりの生命力を保持しているとすれば、その一部分を指すのか、それともその全体をさすのか？　われわれは、レーニン主義は帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義であり、社会主義、共産主義の勝利の時代のマルクス主義であるといつも言つているが、この言い方はその正しさをいまなお保持しているかどうか？　レーニンの元来の結論とわれわれがいつももつているレーニン主義についての概念とがすでに無効となり、正しくないものになつたため、われわれは踵を返して、レーニンによつてとつくに完ぷなきまで反駁され、とつくに実生活のなかで恥ずべき破産をとげた修正主義、日和見主義のそうした結論を受けいれなければならないと言えるかどうか？　これらはいまわれわれの前におかれているどうしても回答せねばならぬ問題である。マルクス・レーニン主義者は、徹底的に帝国主義者と現代修正主義者のこれらの問題についての謬論を暴露し、大衆の間でのかれらの影響を一掃して、一時かれらにまどわされた一部の人びとを目ざめさせるとともに、人民大衆の革命的意志をさらに激発させるべきである。

二

アメリカ帝国主義者、多くの国のブルジョアジーの公開的な代表者、

チトー一味を代表とする現代修正主義者と社会民主党の右翼は、世界の人民を岐路にひきこむために、現代の世界情勢をまつたく歪曲してえがくことに全力をつくし、それによつて彼らのいわゆる「マルクス主義が時代おくれになつた」とか、「レーニン主義も時代おくれになつた」とかというたわ言を証明しようと企てている。

チトーは昨年末のある演説で、現代修正主義者のいわゆる「新時代」なるものをくりかえし述べた。チトーは、「こんにちの世界はすでに各国がほつと一息つき、静かに自国内の建設任務につとめてもよい新時代に入つた」とのべている。彼はまた、「われわれは、議事日程に新たな問題があらわれた時代にふみこんだ、これらの問題は戦争と平和の問題ではなく、協力、経済、およびその他の方面の問題である。経済協力についていえば、なお経済競争の問題がある。」①ともべている。この裏切り者は、世界における階級的矛盾と階級闘争の問題を完全に抹殺し、われわれの時代は帝国主義とプロレタリア革命の時代であり、社会主義、共産主義の勝利の時代であるというマルクス・レーニン主義者の一貫した解釈を抹消しようと企図しているのである。

だが、世界の真実の状況はどうであろうか？

帝国主義国の国内の搾取され抑圧されている人民は「ほつと一息ついてもよい」だろうか？　いまなお帝国主義の抑圧のもとにあるすべての植民地および半植民地の人民は「ほつと一息ついてもよい」だろうか？

アジア、アフリカおよびラテン・アメリカにおけるアメリカ帝国主義者を頭とする武力干渉が「静か」になつているだろうか？　アメリカ帝国主義者がいまなおわが国の台湾を占領しているとき、われわれの台湾海峡が「静か」になつているだろうか？　アルジエリアとアフリカの多

① 1959年12月12日、ザグレブでのチトーの演説

くの地区の人民がフランス、イギリスなどの帝国主義の武力弾圧をこうむつているとき、アフリカ大陸は「静か」になつているだろうか？　アメリカ帝国主義が爆撃、暗殺、転覆活動によつてキューバの人民革命を破壊しようとしているとき、ラテン・アメリカは「静か」になつているだろうか？

いわゆる「自国内の建設任務につとめる」というのは何を「建設する」ことなのか？　周知のように、現在の世界にはいろいろ異なつた国があるが、主なものは根本的に異なつた性質の社会制度をもつ二種類の国であつて、そのひとつは社会主義的世界体制にぞくする国であり、いまひとつは資本主義的世界体制にぞくする国である。チトーの言うのは、自国の人民を抑圧し、全世界を抑圧し、軍備拡張をすすめるための帝国主義の「国内の建設」のことなのか？　それとも、人民の幸福を増進し、世界の恒久平和をはかるための社会主義の「国内の建設」のことなのか？

戦争と平和の問題は問題にならないのか？　帝国主義はすでに存在せず、搾取制度はすでに存在せず、したがつてもはや戦争の問題はありえないというのか？　それとも帝国主義と搾取制度を永久に存続させても、戦争の問題はありえないというのか？　実際には、第二次大戦後、戦争はひきつづき連綿としてとだえていないのである。帝国主義が民族解放運動を弾圧する戦争、帝国主義が各国の革命に武力干渉をする戦争は戦争のうちに入らないというのか？　これらの戦争はまだ世界大戦とはなつていないが、こうしたたぐいの局地的な戦争は戦争のなかに入らないとでもいうのか？　これらの戦争は核兵器を使用しておこなわれてはいないが、いわゆる常備兵器を使用しておこなわれる戦争は戦争のなかには入らないとでもいうのか？　アメリカ帝国主義者が1960年の財政予算の60パーセント近くを軍備拡張と戦争準備にふりむけていることも、

アメリカ帝国主義の好戦政策にはかぞえられないとでもいうのかどうか？　西ドイツと日本の軍国主義の復活はけつして新しい大戦の危険を人類にもたらさないとでもいうのかどうか？

どのような「協力」であるのか？　プロレタリアートはブルジョアジーと「協力」して資本主義を保護するのか？　植民地・半植民地の人民は帝国主義と「協力」して植民主義を保護するのか？　社会主義国は資本主義国と「協力」して、帝国主義制度が本国の人民を抑圧し、民族解放戦争を鎮圧するのを保護するのか？

要するに、現代修正主義者のいわゆる「時代」についての説によれば、それはほかでもなく、以上にのべた諸問題のうえでレーニン主義に挑戦したのである。かれらのねらいは、帝国主義国の自国における人民大衆と独占ブルジョアジーとの矛盾を抹殺し、植民地・半植民地の人民と帝国主義侵略者との矛盾を抹殺し、社会主義制度と帝国主義制度との矛盾を抹殺し、平和を愛する世界人民と帝国主義の好戦グループとの矛盾を抹殺することにある。

「時代」の区別については、もともといろんな説がある。大づかみにいえば、ひとつはデタラメを言い、あいまい模糊とした、とらえどころのない辞句をデッチあげ、もてあそび、これによつて時代の本質をおおいかくすのであつて、これは帝国主義者、ブルジョアジーおよび労働運動のなかの修正主義者の常套手段である。いまひとつは階級的矛盾と階級闘争の全局的な具体的情勢を具体的に分析し、厳格な科学的規定づけをおこない、これによつて時代の本質を徹底的に暴露するのであつて、これはすべての厳粛なマルクス主義者のおこなう仕事である。

レーニンは時代を区別する標識についてつぎのようにのべている。

「……ここで問題にしているのは、大きな歴史的時代である。過去であれ将来であれ、おのおのの時代にはすべて、個々の、部分的な、ときに

は前進し、ときには後退する運動があり、一般的運動または運動の一般的速度からそれる各種の傾向があるものである。われわれは、この時代の個々の歴史的運動が、どういう速度で、どういうふうにうまいぐあいに発展するかを知ることはできない。しかし、われわれは、どの階級が、あれこれの時代の中心に立ち、その時代の主要な内容、その時代の発展の主な方向、その時代の歴史的背景の主要な特徴、等々を決定するかを知ることができるし、またたしかに知つている。この基盤に立つてはじめて、すなわち、いろいろの『時代』（個々の国の歴史の個々の挿話ではなしに）の区別の根本的特徴を、第一に考慮することによつてはじめて、われわれは自分の戦術をただしく打ちたてることができる……」①と。ここでレーニンが言つているいわゆる時代とは、どの階級が時代の中心に立つかという問題であり、どの階級がその時代の主要な内容を決定するか、その時代の発展の主な方向を決定するかという問題である。

マルクスの弁証法に忠実なレーニンは、いつ如何なるときにも、階級関係を分析するという立場から離れることがなかつた。かれは、「マルクス主義は、『利益』というものを、日々の生活の幾百万という事実に現われる階級的矛盾と階級闘争とにもとづいて判断する。」②とし、「マルクスの方法は、なによりもまず、あたえられた具体的時機の、あたえられた具体的情勢のもとでの歴史過程の客観的内容を考慮にいれること、それによつてまず第一に、この具体的情勢のもとでどの階級の運動が社会進歩をおしすすめるであろう主要な原動力かを理解することである。」③と考えた。レーニンは、階級的分析にもとづいて具体的な歴史

① 「よその旗をかかげて」
② 「第二インタナショナルの崩壊」
③ 「よその旗をかかげて」

発展の過程を観察すべきであり、「一般的な社会」とか、「一般的な進歩」とかについて漠然と語つてはならぬ、とつねにわれわれに要求している。われわれマルクス主義者は、単に目先のある事変、ちよつとしたある政治的変化にもとづいてプロレタリアートの政策をきめるのではなくて、全歴史的時代の階級的矛盾と階級闘争の全般からプロレタリアートの政策を規定しなければならない。これはマルクス主義者の基本的な理論的陣地である。レーニンはまさにこの陣地をしつかと占領し、階級的変化の新しい時期、歴史の新しい時期において、プロレタリアートの勝利に人類の希望のすべてをかけ、プロレタリアートはこの大革命の搏闘のなかで勝利をおさめて、プロレタリアート独裁をうちたてるよう準備すべきであるという結論に達したのであつた。十月革命ののち、1918年のロシア共産党（ボ）第七回大会において、レーニンは、「われわれは、商品生産の発展、資本主義への移行、資本主義から帝国主義への発展という一般的な基礎から出発しなければならない。こうすることでわれわれは、理論的に陣地を占め、それを固めることになるのである。そして、社会主義を裏切つた者でないかぎりだれひとり、この陣地からわれわれを追いだそうとするものはないだろう。このことからまた、社会主義革命の時代がはじまりかけている、という結論が、同じように不可避的に出てくる。」とのべた。これがすなわちレーニンの結論であり、かつまた現在にいたるもなおすべてのマルクス主義者が深く考える必要のある結論である。

われわれの時代は帝国主義とプロレタリア革命の時代であり、社会主義、共産主義の勝利の時代であるという革命的マルクス主義者の見解はくつがえすことの出来ないものである。なぜなら、この見解は現在のわれわれの偉大な時代の基本的特徴をまつたく正しくつかんでいるからである。レーニン主義はこうした偉大な時代における革命的マルクス主義

の継続であり発展であるという見解、レーニン主義はプロレタリア革命、プロレタリアート独裁の理論と政策であるという見解もまた、くつがえすことの出来ないものである。なぜならば、レーニン主義こそはわれわれのこの偉大な時代における労働者階級と独占資本との矛盾、帝国主義諸国相互の矛盾、植民地・半植民地の人民と帝国主義との矛盾、プロレタリアートが勝利をおさめた社会主義国と帝国主義国との矛盾を暴露したものにほかならず、したがつてレーニン主義はわれわれの勝利の旗じるしとなつているからである。だが、革命的マルクス主義のこの一連の見解に反して、チトーたちのあの「新時代」なるもののなかには、実際には、帝国主義は姿をみせず、プロレタリア革命は姿をみせず、プロレタリア革命、プロレタリアート独裁の理論と政策ももちろん姿をみせない。要するに、彼らの方には、われわれの時代の階級的矛盾と階級闘争の根本的な焦点がみられず、レーニン主義の根本問題が見つからず、レーニン主義が見いだせないのである。

現代修正主義者は、かれらのいわゆる「新時代」では、科学技術の進歩により、マルクス、レーニンが提起した「旧い概念」はもはや通用しなくなつたと言い張つている。チトーは、「われわれは教条主義者ではない。なぜなら、マルクスとレーニンは月ロケット、原子爆弾および大きな技術的進歩について予言していないからである」①というような説を出した。教条主義者ではないとは、結構な話である。誰がかれらに教条主義者になれと要求したか？　ところが、マルクス・レーニン主義のために教条主義に反対することもできるし、教条主義に反対するという口実で、実際にはマルクス・レーニン主義に反対することもできるのである。チトーたちは後者のたぐいに属する。科学技術の進歩が社会

① 1959年12月12日、ザグレブでのチトーの演説

の発展にいかなる影響をもたらすかという問題については、唯物史観によつてそれを見ることができないために、正しくない見方をするものがいる。これはうなずけることである。しかし、現代修正主義者は、わざとこの問題について混乱をつくりだし、科学技術の進歩を利用してマルクス・レーニン主義をくつがえそうと企てているのである。

こと数年らい、科学技術上の成果において、ソ連は世界の最前列に立つている。ソ連のこれらの成果は、偉大な十月革命の産物である。これらのきわだつた成果は、人類の自然界征服の新紀元をしめすとともに、世界の平和をまもる事業にとつてもきわめて大きな役割をはたしている。だが、現代の技術発展の新しい条件のもとで、はたしてチトーがいうごとく、マルクス・レーニン主義の思想体系がマルクスとレーニンの「予言しなかつた」ところの「月ロケット、原子爆弾および大きな技術的進歩」のためすでに動揺してしまつたかどうか？　マルクス・レーニン主義の世界観、社会史観、道徳観などの基本的観念がそのためすでにいわゆる陳腐な「教条」にかわり、階級闘争の法則がもはやこんご二度と存在しなくなつたと言えるかどうか？

マルクスとレーニンは現在まで生きてはおらず、もちろん、現代の世界における技術的進歩の具体的状況を目にすることはできなかつた。だが、自然科学の発展、技術の進歩は、資本主義制度にたいしていえば、つまるところ何を予告しているのであろうか？　マルクスとレーニンは、これは新しい社会革命を予告するだけであつて、決して社会革命が消失することを予告するものではない、と見なしているのである。

マルクスとレーニンは、自然科学と技術の、自然界を征服する新しい発見と進歩によろこびを感じていたことを、われわれは知つている。エンゲルスは、「マルクスの送葬にあたつて」のなかで、つぎのようにのべている。

「科学はマルクスにとつて、歴史的に推進作用をはたす革命的な力であつた。なんらかの理論科学でその実際的應用がまだ全然見とおしえないような新しい発見がなされるごとに、彼は異常なよろこびを感じたけれども、産業に、一般に歴史的発展にただちに革命的に影響をおよぼす発見がなされたばあいには、彼はまつたくちがつたよろこびを感じた」。

エンゲルスは、この言葉につづけてまた、「**マルクスは何よりもまず革命家だつたことを知らねばならない**」とものべている。まさにそのとおりである！　マルクスはつねに、プロレタリア革命消失論者としての観点ではなく、プロレタリア革命家としての観点をもつて、自然界を征服するすべての新発見をみていたのである。

ウイルヘルム・リープクネヒトは「マルクスの想い出」のなかで、こう書いている。

「革命がすでに窒息させられたと夢みて、自然科学がまさに新しい革命を準備していることに考えおよばなかつた、ヨーロツパの勝利した反動勢力を、マルクスは嘲り笑つた。前世紀に全世界をひつくりかえした蒸気の王は、いまやその支配の末路にきており、いまひとつの比較にならないほど大きな革命的力――電力の火花がこれにとつてかわろうとしている。

……この事の結果は予想することができない。経済革命ののちには、かならず政治革命がやつてくる。なぜなら、後者は前者の表現にすぎないからである。

マルクスは、科学と力学のこうした進歩についてのべたとき、彼の世界観、とりわけいまでは唯物史観といわれているものを、このようにはつきりとしめした。そのため、わたしがまえにもつていた若干の疑問は春の日ざしをあびた積雪のようにとけてしまつた。」

マルクスは、このように科学と技術の進歩のなかから、革命の息吹きを感じとつていたのである。かれは、科学技術の新しい進歩はやがて資本主義制度をくつがえす社会革命をひきおこす、と考えていた。マルクスからみれば、自然科学と技術の進歩はいちだんとマルクス主義の世界観ぜんたいの陣地を強化し、唯物史観の陣地を強化するものであつて、決してそれを動揺させるものではなかつた。自然科学と技術の進歩は、プロレタリア革命と抑圧されている民族が帝国主義に反対して闘う陣地をいちだんと強化するものであつて、決してそれを弱化させるものではない。

マルクスと同様に、レーニンも技術の進歩を社会制度の革命の問題とむすびつけて観察した。したがつて、レーニンはつぎのように考えていた。「**蒸気の時代はブルジョアジーの時代であり、電気の時代は社会主義の時代である**」①と。

マルクスとレーニンのこうした革命的精神と現代修正主義者の革命にそむく恥ずべき態度とをくらべてみていただきたい！

階級社会において、帝国主義の時代において、マルクス・レーニン主義者はつねに、階級分析の観点からのみ、技術の発展と使用の問題を見ることができるのである。

社会主義制度は進歩的なものであり、人民の利益を代表するものであるから、したがつて、社会主義国は、原子力やロケツトなどの新しい技術を国内の平和建設に奉仕させ、自然界を征服するのである。社会主義国がこうした新しい技術をますます多く掌握し、その発展をますますはやめることは、社会生産力の高速度の発展によつて人民の需要を満足させるという目的をさらに達成すると同時に、なおいつそう帝国主義戦争を制止する力をつよめ、世界の平和をまもる可能性をますことになる。

---

① 「全ロシア中央執行委員会および人民委員会議の活動について」

したがつて、社会主義諸国の人民の福祉のため、全世界人民の平和の利益のために、社会主義諸国はその可能性があるかぎり、こうした人民の福祉をはかるための新しい技術をますます多く掌握すべきである。いま、社会主義のソ連は、新しい技術の発展の面で、いちじるしい優勢を占めている。周知のように、月に命中したロケツトはほかでもなくソ連が発射したものであつて、資本主義のもつとも発達した国アメリカが発射したものではない。このことは、社会主義国のみが、新しい技術を大規模に発展させうる限りない前途をもつていることを物語つているのである。

これに反して、帝国主義制度は反動的なものであり、反人民的な制度であるから、それゆえ、帝国主義国はこうした新しい技術を外国を侵略し、自国の人民をおびやかす軍事的目的に使用し、殺人兵器の製造に使用するものである。帝国主義国についていえば、こうした新しい技術の出現は、社会生産力の発展と資本主義的生産関係との矛盾をさらに新しい段階へおしすすめるのみであつて、それがもたらすものは決して資本主義の永久的な存続といつたようなものではなく、自国人民の革命をいつそう激発させるだけであり、資本主義というこの人の血をすする、罪悪にみちた旧い制度が壊滅するだけのことである。

アメリカ帝国主義者とその仲間は、原子爆弾のような武器を利用して全世界に戦争による脅威をくわえ、恐喝をおこなつている。かれらは、アメリカ帝国主義の支配に服さぬものはすべて壊滅するだろうと言つている。チトー一味も尻馬にのつて、アメリカ帝国主義のために三味線を弾き、人民大衆のあいだに原子戦争の恐怖をまき散らしている。アメリカ帝国主義の恐喝とチトー一味の三味線は、一時的には真相のわからぬ人びとを迷わせることはできるが、しかし、自覚した人民をおどしあげることはできないし、一時は真相のわからなかつた人びとでさえもすすんだものの助けをえてしだいにわかつてくるであろう。

マルクス・レーニン主義者はゆらい、世界史上で、人類の運命を決定するものは技術ではなく、人であり、人民大衆である、と考えている。中国では、抗日戦争前と抗日戦争中、一部のもののあいだに一時「唯武器論」なるものが流行し、日本の兵器は新式で、技術的にも高いとか、中国の武器は旧式で、技術的にも低いとかと言つたもので、したがつて、かれらの結論はいわゆる「中国はかならず亡びる」というのであつた。毛沢東同志がその当時に発表した「持久戦論」は、こうしたでたらめな議論を論破した。毛沢東同志はつぎのように分析した。日本帝国主義者の中国侵略戦争はかならず敗北する。なぜなら、それは反動的であり、正義にもとるものであり、道義がなくて味方がすくないからである。だが、中国人民の抗日戦争はかならず勝利する。なぜなら、それは進歩的であり、正義にかなつており、道義があつて味方が多いからである。毛沢東同志は、戦争の威力のもつとも深い根源は民衆のなかにあり、人民大衆が自覚し、団結して組織した人民の軍隊は天下無敵である、と指摘した。これはマルクス・レーニン主義の論点である。結果はどうであつたか？　結果は、マルクス・レーニン主義の論点が勝利し、くだんの「亡国論」がついに敗北したのである。第二次大戦後、朝鮮戦争で、朝鮮と中国の人民は、兵器装備の点で自分たちよりはるかに優れていたアメリカ侵略者をうちやぶり、またしてもこのマルクス・レーニン主義の論点を立証したのであつた。

自覚した人民は、つねに新しい方法をみつけて、反動派の優勢な武力に対抗し、自己の勝利をかちとることができる。過去の歴史でもそうであつたし、現在および将来においてもやはりそうである。社会主義のソ連がすでに軍事技術上で優勢を占め、アメリカ帝国主義者に原子兵器と核兵器での独占的地位を喪失させたことによつて、また世界人民の自覚とアメリカ国内の人民の自覚によつて、いま世界には原子兵器と核兵器

の禁止協定が成立する可能性が存在するようになつた。われわれはこのような協定を成立させるために努力するものである。好戦的な帝国主義者とは反対に、社会主義諸国と全世界の平和を愛する人民はすべて、原子兵器ならびに核兵器の禁止と廃棄を積極的に、断固として主張している。われわれは、つねに帝国主義戦争に反対して闘い、つねに原子兵器と核兵器の禁止のために闘い、つねに世界の平和をまもるために闘つている。この闘いがますますその幅をひろげ、ますますその深度を深めて、アメリカ帝国主義者とその他の帝国主義者の骨の髄までしみこんだ好戦的な残酷な姿をいよいよ全面的に、ますます徹底的に暴露するならば、アメリカ帝国主義者とその他の帝国主義者を世界の人民のまえにいつそう孤立させることができ、アメリカ帝国主義者とその他の帝国主義者の手足をいつそう束縛することができ、それは世界平和の事業にとつていつそう有利である。これに反して、われわれがもしも、帝国主義が戦争をひきおこす危険にたいする警戒心を失い、諸国民を起ちあがらせて帝国主義に反対しようと努力せず、人民の手足をしばりつけるならば、帝国主義は意のままに戦争の準備をすすめることができ、その結果はかならず帝国主義の戦争をひきおこす危険が増大し、いつたん戦争が勃発するや、人民はまつたく準備がないか、準備不足のために、迅速に正しい態度で戦争に対処することができず、したがつて有力に戦争を制止することができなくなるであろう。もちろん、帝国主義者が果して戦争をはじめるか否かはわれわれがきめるのではないのであつて、われわれはなんといつても帝国主義者の参謀長ではない。各国人民の自覚が高まり、十分な備えがありさえすれば、社会主義陣営もすでに現代兵器を掌握したという条件のもとで、もしアメリカ帝国主義者またはその他の帝国主義者が原子兵器と核兵器の禁止協定の達成をこばみ、かつまたあえて「天下の一大反対をかえりみず」、いつたん原子兵器と核兵器をもちいて戦争を敢行するならば、その結果は世界人民の包囲のなかにあるこれらの野獣ししんがすみやかに壊滅させられるだけであつて、人類の壊滅などということは決してありえない、と断定できる。帝国主義が犯罪的な戦争をひきおこすことは、われわれの終始反対するところである。なぜなら、帝国主義戦争は各国人民（アメリカその他の帝国主義国の人民をふくむ）にぼう大な犠牲をもたらすからである。しかし、もしも帝国主義者がこうした犠牲を各国人民の頭上におしつけるならば、まさしくロシア革命や中国革命の経験とおなじく、この種の犠牲は代価をうけるものであることを、われわれは信じている。勝利した人民は、帝国主義の死滅した廃墟のうえに、きわめて急速な足どりで資本主義制度より幾百幾千倍も高い文明を創造し、自己の真に幸せな将来を創造するであろう。

結論はただつぎのとおりでしかありえない。いずれの面から見ても、原子力、ロケットなどといつたこれらの新しい技術はすべて現代修正主義者の言うように、レーニンが指摘した帝国主義とプロレタリア革命の時代の基本的特徴を変化させたということはない。資本主義的帝国主義制度は、みずから倒れるということは絶対にありえず、その国のプロレタリア革命と植民地・半植民地の民族革命によつてうち倒されるのである。当代の技術の進歩は、資本主義的帝国主義制度の滅亡の運命を挽回することはできず、むしろ資本主義的帝国主義制度に新しい弔鐘をうち鳴らすだけである。

三

現代修正主義者は、現代の世界情勢についてのかれらのでたらめな論断から出発し、いわゆるマルクス・レーニン主義の階級分析と階級闘争の理論がすでに時代おくれになつたというかれらのでたらめな論断から

出発して、暴力、戦争、平和共存などの一連の問題で、マルクス・レーニン主義の基本原理を根本的にくつがえそうと企図している。

このほかになお一部ではあるが、べつに修正主義者ではなく、善心善意の人間であつて、こころからマルクス主義者になろうと望んではいるのだが、歴史の若干の新しい現象に直面してそれにとまどい、いささか正しくない考え方をもつているような人びともいる。たとえば、そうした人びとのなかには、アメリカ帝国主義の原子恐喝の政策の失敗はとりもなおさず暴力の終結を意味する、と言うものがいる。われわれは、現代修正主義者の謬論を徹底的に反駁すると同時に、これらの善心善意の人びとに援助をあたえてその正しくない考え方をあらためさせるべきである。

暴力とは何か？　この問題についてレーニンは、「国家と革命」のなかできわめて多くのことをのべている。国家の出現と存在それ自体が一種の暴力である。レーニンは、つぎのようなエンゲルスの説明を紹介した。**「この権力は武装した人間からなつているばかりでなく、物的な付属物、すなわち監獄やあらゆる強制施設からなつている……」**レーニンは、ブルジョア独裁の国家とプロレタリアート独裁の国家というこの二つの性質をことにする国家を区別しなければならず、反革命的暴力と革命的暴力というこの二つの性質をことにする暴力を区別しなければならず、反革命の暴力が存在すれば必然的に革命の暴力がそれに反対するということを、われわれに教えた。革命の暴力なしには、反革命の暴力を絶滅することができない。搾取階級が支配的地位を占めている国家は、とりもなおさず一種の反革命の暴力であり、搾取階級を代表して被搾取階級を弾圧する特別な力である。帝国主義者が原子爆弾またはロケット兵器をもたなかつたときでも、また、こうした新兵器をもつようになつたのちでも、帝国主義の国家は終始自国のプロレタリアートと国外の植

民地・半植民地の人民を弾圧する特殊な力であり、終始こうした暴力機関であつた。たとえ帝国主義者がこうした新兵器を使用できないように仕向けられても、帝国主義国がまだ打倒されず、人民の国家がまだこれにとつてかわらず、その国のプロレタリアート独裁の国家がまだこれにとつてかわらないかぎりは、それはいうまでもなく依然として帝国主義の暴力機関なのである。

歴史はじまつていらい、現在の資本主義的帝国主義者が形づくつているこのように大規模な、凶悪きわまる暴力はいまだかつてなかつた。十余年このかた、アメリカ帝国主義者はひたすら何はばかるところもなく以前に百倍する野蛮な迫害手段をとつて、自国の労働者階級の傑出せる息子を踏みにじり、黒人を踏みにじり、すべての進歩的な人びとを踏みにじり、さらにひたすら何はばかるところもなく全世界をその暴力支配のもとに置くことを公然と宣言しているのである。かれらはひきつづきたえまなく自己の暴力を拡張しており、同時にその他の帝国主義者もまた暴力強化の競争に従事している。

アメリカを頭とする帝国主義諸国の軍事的膨脹は、かつてみられない深刻な資本主義の一般危機のもとに出現した。帝国主義がますます気違いのようにその軍事力を絶頂までひきあげればあげるほど、それはかれら自身が滅亡へ近づいていることをいよいよはつきりと意味するのである。いまでは、アメリカ帝国主義者の一部の代表的人物でさえも、資本主義制度の滅亡の必然性を予感している。だが、帝国主義がすでに滅亡へ近づいているからといつて、帝国主義はみずから自己の暴力に終止符をうち、帝国主義国の為政者がこれまでにうちたてた暴力をみずから放棄するだろうか？

帝国主義者は過去の時期に比較していえば、すでに暴力の愛好者でなくなつており、あるいは暴力にたいする愛好の度合いが減じているとい

えるだろうか？

こうした問題についてレーニンは早くからたびたび回答をあたえている。「資本主義の最高段階としての帝国主義」のなかで、かれはこう指摘している。「……**政治的には、帝国主義は総じて暴力にうつたえ、反動を実施しようとつとめるものである**」と。十月革命ののち、かれは、「プロレタリア革命と背教者カウツキー」のなかで、とくに歴史について述べ、独占前の資本主義と独占資本主義すなわち帝国主義との差異を比較した。かれは、「**独占前の資本主義（その頂点はまさに十九世紀の七十年代であつた）は、その根本的な経済的特質（イギリスとアメリカで、とくに典型的にあらわれている）によつて、相対的にいえばもつとも平和を愛好し、もつとも自由を愛好した。ところが、帝国主義、すなわち二十世紀にやつと最後的に成熟した独占資本主義は、その根本的な経済的特質によつて、もつとも平和を愛好せず、もつとも自由を愛好せず、いたるところで軍国主義を発展させている**」とのべた。もちろん、レーニンのこうした言葉は、十月革命の初期に述べられたものであつた。当時プロレタリアートの国家は誕生したばかりであつて、その経済力はまだきわめて弱かつたが、四十余年を経て、われわれがさきに述べたように、ソビエト国家じたいと全世界は大きな変貌をとげている。それならば、ソ連の力が強大となり、社会主義勢力が強大となり、平和勢力が強大になつたために、帝国主義の本性はすでに変り、したがつて、レーニンの上述の論断は時代おくれになつたということになるのかどうか？　あるいは、帝国主義の本性は変つていないけれども、彼らはもう二度と暴力を使用しなくなつたといえるだろうか？　こうした見方は真実の状況に合致しているのかどうか？

社会主義的世界体制と資本主義的世界体制との闘いのなかで、社会主義体制はあきらかに優勢を占めるにいたつた。この偉大な歴史的事実

は、帝国主義が全世界で擁していた暴力の地位を弱めた。だが、この事実によつて、帝国主義者に今後もう二度と自国の人民を抑圧せず、もう二度と外部へむかつて拡張せず、侵略活動をおこなわないようにさせることができるかどうか？　帝国主義者の好戦グループにこんご「だんびらをなげすて」させ、「足をあらわ」せることができるかどうか？　帝国主義国の兵器商一味をこんご平和な仕事へ改業させることができるかどうか？

これらすべての問題は、いますべてのまじめなマルクス・レーニン主義者の前に提起されており、ぜひとも深く、じつくりと考えなければならない。これらの問題にたいする考え方が正しいか正しくないか、その処理が正しいか正しくないかは、あきらかに、プロレタリアートの事業の成功失敗、全世界の人類の運命と密接なつながりをもつものである。

戦争は、暴力のもつとも尖鋭な表現形態である。そのひとつは国内戦争であり、いまひとつは国外戦争である。暴力は、つねに戦争というこうした尖鋭化した形で表現される訳では決してない。資本主義国におけるブルジョアジーの戦争は、ブルジョアジーの平時における政策の継続であり、ブルジョアジーの平和はブルジョアジーの戦時における政策の継続である。ブルジョアジーはつねに戦争と平和というこの二つの形態を交互に採用して、人民にたいする支配と対外的闘争をおこなう。いわゆる平和な時期には、帝国主義者は武装力にたより、逮捕、監禁、労役、殺害などといつた暴力の形態をもちいて被抑圧階級と被抑圧民族に対処し、同時にまた戦争というこの暴力のもつとも尖鋭な形態をもちいて国内人民の革命を弾圧し、外部にたいする略奪をおこない、外国の競争者を圧倒し、外国の革命を撲滅する用意をする。あるいは、国内の平和と国外の戦争とが同時に存在する。

十月革命の初期に、各帝国主義者は戦争という形態の暴力を採用して

ソ連に対処したが、これは各帝国主義の政策の継続である。第二次大戦中に、ドイツ帝国主義者は大規模な戦争という形態の暴力を採用してソ連を攻撃したが、これはドイツ帝国主義の政策の継続である。だが、いま一面では、帝国主義者は、それぞれ異なる時期には、こんどはソ連と平和共存の外交関係をうちたてているが、もちろん、これも一定の条件のもとにおける帝国主義の政策のちがつた形態での継続なのである。

たしかに、いま平和共存にかんする若干の新しい問題が出現している。帝国主義者は、強大なソ連を前にし、強大な社会主義陣営を前にして、もしもソ連を攻撃し、社会主義国を攻撃すれば、ヒトラーのように、かえつて自己の滅亡をはやめることにならないか、資本主義制度じたいにかえつてもつとも手ひどい結果をもたらすことにならないか、ということをどうしても考慮しなければならなくなつたのである。

「平和共存」、これは、十月革命後、世界に社会主義国が出現したのちにはじめて生まれた新しい概念であり、十月革命前にレーニンが予見した、**「社会主義はすべての国で同時に勝利することはできない。社会主義ははじめは一国または数カ国で勝利するが、他の国々は、なおしばらくブルジョア的あるいは前ブルジョア的な国としてとどまるであろう」**①というこうした状況のなかで形づくられた新しい概念であり、偉大なソ連人民が帝国主義の武力干渉に勝利したのちレーニンによつて提起された新しい概念である。さきに述べたように、はじめには、帝国主義者はソ連との平和共存をけつしてのぞんでいなかつた。ソ連に干渉する戦争が失敗したのちにおいてのみ、数年間の実際的な腕くらべを経たのちにおいてのみ、ソビエト国家が確固として確立されたのちにのみ、ソビエト国家と帝国主義国家とのある種の均勢が形成されたのちにおいてのみ、帝国主義者はやつとソ連との「共存」を受けいれざるをえなくなつたのである。1920年に、レーニンは、**「われわれは、資本主義列強と共存できるような条件をたたかいとつた。いまでは、これらの強国は、われわれと通商関係をむすばざるをえなくなつている」**①と述べた。これからもわかるように、世界最初の社会主義国が帝国主義国との一定期間の平和共存を実現できたのは、まつたく闘いとつたものである。第二次大戦前、1920年から1940年にドイツがソ連を攻撃するまでは、帝国主義とソ連との平和共存の時期であつた。この二十年間、ソ連はひたすら平和共存の信義をまもつた。だが、1941年になると、ヒトラーはソ連との平和共存をのぞまなくなり、ドイツ帝国主義者は信義にそむいて、ソ連にたいし野蛮な攻撃をおこなつた。偉大なソ連を主力軍とする反ファシズム戦争の勝利によつて、世界には、社会主義国と資本主義国とが平和共存するという局面がふたたび出現した。だが、帝国主義者はけつしてあきらめてはいないのである。アメリカ帝国主義は、ソ連および社会主義陣営ぜんたいの周辺のいたるところに軍事基地とミサイル基地網を建設している。アメリカ帝国主義はいまにいたるもわれわれの台湾を占領しており、台湾海峡でたえずわれわれに軍事的挑発をおこなつている。アメリカ帝国主義は朝鮮に武力干渉をおこない、朝鮮の土地で、朝鮮人民、中国人民と大規模な戦いを交えたが、結果はアメリカ帝国主義の失敗によつてはじめて休戦協定が締結されたものの、いまにいたるもアメリカ帝国主義は朝鮮人民の統一に干渉している。アメリカ帝国主義は、フランス帝国主義占領軍のベトナム人民に反対する戦争に武器を供給して援助し、いまにいたるもベトナム人民の統一に干渉している。アメリカ帝国主義は、かつてハンガリーで反革命の叛乱をつくりだし、いまにいた

① 「プロレタリア革命の軍事綱領」

① 「わが国の内外情勢と党の任務」

るも東ヨーロッパの社会主義諸国およびその他の社会主義国でたえずさまざまな方法を利用し、転覆活動をくわだてている。事実はやはり、レーニンが1920年2月アメリカの記者にたいして語つたように、平和の問題については、「**われわれのがわには何の障害もない。アメリカ（およびその他の国）の資本家のがわの帝国主義こそ障害である**」①のである。

社会主義国の外交政策は、平和政策以外のなにものでもありえない。社会主義制度は、われわれが戦争を必要とせず、絶対に戦争をひきおこさず、隣国の一寸の土地をも侵略占領することは絶対に許されないし、絶対にすべきでなく、また絶対にできないということを決定づけている。中華人民共和国は誕生していらい、ひたすら平和外交の政策を堅持してきている。わが国はインド、ビルマのこの二つの隣国と共同して有名な平和共存の五原則を提唱した。わが国はまた、1955年のバンドン会議で、アジア、アフリカの諸国とともに平和共存の十原則を採択した。ここ数年らい、わが国の共産党とわが国の政府は一貫して、フルシチョフ同志を先頭とするソ連共産党中央ならびにソ連政府が平和をかちとるためにおこなつている活動を支持しており、ソ連共産党中央ならびにソ連政府がおこなつている平和をかちとるための活動は、世界の各国人民のまえで、社会主義国の平和外交政策が確固たるものであることをいつそうよく証明し、各国人民が帝国主義の新しい世界大戦の発動を制止し、世界の恒久平和をかちとる必要があることをいつそうよく証明するものであると考えている。

1957年のモスクワ会議の宣言は、「**平和の事業は、つぎのように現代の強力な諸勢力によつてまもられている。ソ連を先頭とする無敵の社会主義陣営、反帝国主義の立場をとり、社会主義諸国とともに広大な平和地域をつくりだしているアジア、アフリカの平和愛好諸国、国際労働者階級、とくにその前衛である共産党、植民地および半植民地人民の解放運動、世界各国人民の平和をかちとる大衆運動がそれである。このほか、中立を宣言したヨーロッパ諸国の人民、ラテン・アメリカ諸国の人民、そして帝国主義諸国の人民大衆も新しい戦争をひきおこそうとする計画に強く抵抗している。これらの巨大な勢力の連合は戦争の勃発を阻止することができる。**」とのべている。これらの強大な勢力をひきつづき発展させていきさえすれば、平和共存の局面はひきつづき保持することが可能であり、さらには平和共存のある種の協定を正式にとりむすぶことすらでき、ひいては原子兵器と核兵器の禁止協定を達成することも可能である。これは世界各国の人民の願望に合致する結構なことである。しかし、こうした状況のもとにあつても、帝国主義制度がなおも存在するかぎり、暴力のもつとも尖鋭化した形態としての戦争はけつして世界でなくなつてはいない。事態は、ユーゴスラビアの修正主義者がいつているように、レーニンが日和見主義に反対するさいくりかえし説明し、くりかえし堅持した「**戦争は政策の継続である**」という定義がもはや時代おくれになつた①、と言うようなことは決してないのである。

われわれはレーニンの思想がまつたく正しいものであると信じている。つまり、戦争は搾取制度の必然的産物であり、現代の戦争の根源は帝国主義制度である。帝国主義制度と搾取階級が死滅するまでは、あれこれの性質をもつ戦争はやはりどうしても出現するであろう。それは帝国主義の世界再分割のために発生する相互間の戦争でありうるし、帝国主義と被抑圧民族との間の侵略と反侵略の戦争でありうるし、帝国主義国内の被搾取階級と搾取階級との間の革命と反革命の国内戦争でありう

① 「アメリカの新聞『ニューヨーク・イヴニング・ジャーナル』特派員の質問にたいする回答」

① ユーゴスラビア「ナロードナ・アルミヤ」1958年11月28日「積極的共存と社会主義」参照

るし、もちろん、帝国主義が社会主義国を攻撃して、社会主義国がやむなく防御するという戦争でもありうる。こうしたすべての戦争は、おしなべて一定の階級の政策の継続である。マルクス・レーニン主義者は絶対にブルジョアジーの平和主義の泥沼に落ちこんではならず、このあらゆる戦争の問題については、具体的な階級分析の方法をもちいて理解し、その中からプロレタリアートの政策上の結論をひきだすほかはない。「プロレタリア革命の軍事綱領」のなかで、レーニンがのべているとおり、**「あらゆる戦争は他の手段をもつてする政策の継続にすぎないということを忘れるのは、理論上まつたく誤りである」。**

帝国主義は、その略奪、抑圧の目的を達成するためには、いつも片手は戦争、片手は「平和」という両手を使うものである。ゆえに、各国のプロレタリアートと各国の人民も、かならず両手を使つて帝国主義に対処し、片手では帝国主義の平和についての偽瞞を暴露し、真の世界平和をかちとるために力をつくすとともに、片手では帝国主義が戦争をひきおこしたとき正義の戦争によつて帝国主義の正義にもとる戦争を終結させるための用意をする必要がある。

要するに、世界各国人民の利益のためには、暴力、戦争、平和共存といつた諸問題について、現代修正主義の謬論を粉砕し、マルクス・レーニン主義の観点を堅持しなければならない。

ユーゴスラビアの修正主義者は、暴力固有の階級性を否定し、したがつて革命の暴力と反革命の暴力との根本的な区別を抹殺している。また、戦争固有の階級性を否定し、したがつて正義の戦争と正義でない戦争との根本的な区別を抹殺している。また、かれらは帝国主義戦争が帝国主義の政策の継続であることを否定し、帝国主義が大戦をふたたびひきおこす危険性を否定し、搾取階級が消滅されたのちにはじめて戦争の可能性がなくなるということを否定し、ひいてはアメリカ帝国主義の頭

目アイゼンハワーを「冷たい戦争をなくし、恒久平和と、ことなつた政治制度の間での平和的競争とをうちたてた創始者」①であると恥知らずにも言つている。かれらは、平和共存という条件のもとでは、やはり政治、経済、イデオロギーの各分野をふくむ複雑な、激しい闘争が存在することを否定している、等々。——こうしたユーゴスラビアの修正主義者の論点は、いずれも各国のプロレタリアートと各国の人民の思想を毒するためのものであり、帝国主義の戦争政策に有利なものである。

四

現代修正主義者は社会主義国の対外的な平和政策と資本主義国内部のプロレタリアートの対内政策とを混同して一律に論じており、したがつて、社会制度のことなつた国々の平和共存ということは、資本主義が平和裏に社会主義に成長伸展できるということであり、ブルジョアジーの支配のもとにおける各国のプロレタリアートが階級闘争を放棄することができ、ブルジョアジー、帝国主義者と「平和な協力」をすることができるということであり、また、プロレタリアートと一切の被搾取階級が階級社会のなかで生活していることを忘れるべきだということであるなどと考えている——こうした論点はこれまたすべてマルクス・レーニン主義と根本的に対立したものである。かれらの目的は、帝国主義の支配を保護し、プロレタリアートと一切の勤労大衆に資本主義の奴隷としての状態をいつまでも受けいれさせておこうとすることにある。

各国の平和共存と各国人民の革命とは、もともと二つの事柄であつて、一つの事柄ではなく、二つの概念であつて、一つの概念ではなく、二つの問題であつて、一つの問題ではない。

---

① ユーゴスラビア「ボルバ」1959年12月4日「アイゼンハワーのローマ到着」参照

平和共存というのは、国と国との相互関係の問題を言つているのである。革命というのは、自国の抑圧された人民が抑圧階級を打倒する問題を言つているのであり、植民地・半植民地国家について言えば、なによりもまず国外の抑圧者つまり帝国主義者を打倒する問題を言つているのである。十月革命の以前には、世界には社会主義国と資本主義国との平和共存といつた問題は存在しなかつた。なぜなら、当時はまだ社会主義国というものがなかつたからである。しかし、世界にはプロレタリア革命と民族革命の問題はすでに存在していた。なぜなら、各国の人民は自国の具体的状況にもとづいて、あれこれの革命を自国の運命を決定する議事日程に早くからのぼせていたからである。

われわれはマルクス・レーニン主義者であつて、われわれはゆらい、革命は各民族じたいの事柄であると見なしている。われわれはゆらい、労働者階級は自分の力でのみ自分を解放できるのであつて、ある国の人民が解放されるには自国人民の自覚、自国の革命成熟の条件に拠らねばならぬと考えている。革命は輸出することはできないし、輸入することもできない。なにびとも、他国の人民に革命をやらせないということはできないし、また、「苗を引つぱつて育てる」ようなやりかたでもつて他国の革命をつくりあげることもできない。

1918年6月、レーニンはうまいことを言つている。**「革命が注文書や協定にしたがつて他国におこりうるように考えている連中もいる。こうした連中は、気違いか、そうでなければ挑発者である。われわれはこの十二年間に二つの革命を経験した。われわれが知つているように、革命は注文書や協定にしたがつてやれるものではない。革命は、何千万という人びとがもうこれ以上、こんな生活はできないと考えたとき、おこつてくるものである」**。①ロシア革命の経験のほか、中国革命の経験もまた最良の例証ではないだろうか？　われわれ中国人民も、中国共産党の

指導のもとに数回にわたる革命を経験した。帝国主義者と一切の反動派はやはり気違いのようになつて、われわれの革命はなにか外部からの注文書や協定にしたがつてすすめられているとつねにわめきたてたものである。だが、全世界の人民がすべて知つているように、われわれの革命はけつして国外から輸入されたものではなく、わが国の人民大衆が旧中国ではもうこれ以上生活してゆけなくなつたからであり、わが国の人民が自己のあらたな生活をきずきあげたいと要求したからである。

社会主義国が帝国主義の進攻をうけて、やむなく防衛戦をおこない、反撃にでるとき、ちようど反ヒトラー戦争におけるソ連のばあいのように、国外からの敵を追撃し、せん滅するために国境を越えることは、そうすべきであるか、そうすべきでないか？　疑いもなく、これは全くそうすべきであり、全くそうする必要があり、全く正義にかなつたことである。共産主義者の厳格な原則によれば、社会主義国がそうできるのはぜつたいに帝国主義が社会主義国にむかつて侵略戦争をしかけてきたときにかぎるべきである。社会主義国にとつては、国外の敵から侵略をうけていないのに、自己の軍隊に国境を越えさせるようなことは決してゆるされず、決してなすべきでなく、また決してなすことができない。社会主義国の軍隊は正義の軍隊である。こうした軍隊が国外の敵に反撃をくわえるため余儀なく国境をこえたばあい、その到達した地方で影響をおよぼし、役割をはたすのは当然であるが、しかし、こうしたばあいでも、これらの地方やこれらの国ではやはり、ただ人民大衆の意志によつてのみはじめて人民の革命がおこり、社会主義制度がうちたてられるのである。

前ページ①　「モスクワの労働組合と工場委員会との第四回協議会」

革命思想の伝播には、ゆらい国境がない。だが、革命思想はただ具体的な国の具体的な条件のもとで、人民大衆の手を経てのみ、はじめて革命の実をむすびうるのである。プロレタリア革命の時代にそうであるばかりでなく、ブルジョア革命の時代にも全くそのとおりであつた。革命期の各国のブルジョアジーはルソーの「民約説」を福音と見なしたし、各国の革命的プロレタリアートはマルクスの「共産党宣言」、「資本論」やレーニンの「資本主義の最高の段階としての帝国主義」、「国家と革命」などを福音と見なしている。時代がちがい、階級がちがい、意識がちがい、革命の性質がちがつても、その国に革命要求がうまれ、革命の時機が熟するかぎり、なにびとも革命の爆発をはばむことはできない。社会主義制度がとどのつまり資本主義制度にとつてかわるということ、これは人びとじしんの意志にかかわりない客観的な法則である。反動派が歴史の車輪の前進をいかに阻止しようとくわだてても、革命はおそかれ早かれ発生し、かならず勝利をおさめるであろう。人類の歴史がはじまつていらい、いつさいの社会の更迭はすべてこのとおりであつた。封建制度が奴隷制度にとつてかわり、資本主義制度が封建制度にとつてかわつたということ、こうしたこともすべて人びとじしんの意志とかかわりない法則であつて、こうした更迭はこれまたすべて革命をつうじておこなわれたのである。

悪名たかい以前の修正主義者ベルンシユタインはかつてつぎのようなことを言つたことがある。「古代ローマを回想してみるがいい。そこにもかつて支配階級はあつたが、この階級は労働にたずさわらず、ただ結構な暮しをしていたので、けつきよく弱まつてしまつた。こうした階級はしだいにその支配をひきわたさねばならなくなるものである。」①

① ベルンシユタインの「経済生活の各種の形態」参照

奴隷主という「この階級が弱まつた」ということ、これはベルンシユタインがおおいかくすことのできない歴史的事実であつて、あたかも現在アメリカ帝国主義者が自己の日ましに弱まりゆくこの現実の事実をおおいかくすことができないのと同様である。しかし、この無恥な、歴史学者をもつて自任するベルンシユタインは、古代ローマ史のつぎのような最も基本的な事実をわざとおおいかくしている。それは、つまり、奴隷主は決してみずから「その支配をひきわたした」のではなく、その支配は長期の反復した、たえまない奴隷革命によつて打倒されたのだということである。

革命というのは、被抑圧階級が革命の暴力をもちいることを意味しており、革命戦争を意味している。奴隷革命がそうであつたし、ブルジョア革命もそうであつた。レーニンは正しくもつぎのように言つている。

「歴史がおしえるところによれば、これまでにどんな被抑圧階級でも、独裁の時期をとおらずに、政権を奪取し、搾取者のもつとも猛烈な、もつとも気違いじみた、反抗を暴力的に鎮圧する時期をとおらずに、支配するようになつた被抑圧階級はなかつたし、またそれは不可能である。……ブルジョアジーが先進国で権力を獲得したのは、幾多の蜂起、内戦を通じてであり、国王、封建領主、奴隷所有者と彼らの復古の企図とを暴力的に鎮圧することをつうじてであつた。」①

では、どうして事態はそうなのか？

われわれはここでもやはり、レーニンの言葉をもつて問題にこたえねばならない。

第一には、まさしくレーニンがのべているように、**「たたかわないですすんで席をゆずるような支配階級は世の中にまだあつたためしがない**

① 「共産主義インタナショナル第一回大会」

からである。」①

第二には、まさしくレーニンがのべているように**「ふつう、まつさきに暴力に、内戦に訴え、『銃剣を日程にのぼせる』のは、反動階級じしんである」**②からである。

したがつて、われわれはプロレタリア社会主義革命というものをいかに考えねばならないか？

われわれはやはりふたたびレーニンのつぎの二節の言葉をもつて問題にこたえねばならない。

われわれはレーニンのつぎの言葉を読んでみよう。

> **「歴史上の大革命で、内戦なしにすんだものはまだ一つもなかつたし、真のマルクス主義者で、内戦なしに資本主義から社会主義へうつることを考えたものはひとりもなかつた。」**③

レーニンのこの一節の言葉は、問題を非常にはつきりと解明している。

われわれはさらにレーニンの、いま一節の言葉を読んでみよう。

> **「たとえ社会主義が平和的に誕生するとしても、資本家諸君は、やはり、それをそのように誕生させることを望まないであろう。こう言つても、まだすこし言葉がたりないようだ。たとえ戦争がないにしても、やはりすべての資本家諸君はそのような平和的な発展をくい止めるために、あらゆることをするであろう。大革命は、フランス大革命のように平和的にはじまつたときでさえ、結局は、反革命的ブルジョアジーによつてはじめられた気違いじみた戦争におわつたのである。」**④

---

① 「プレスニヤ地区の労働者会議での演説」
② 「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」
③ 「予言」
④ 「校外教育第一回全ロシア大会」

問題はまたもやレーニンによつて、きわめてはつきりと解明されているのである。

偉大な十月革命は、レーニンのこうした論断の最良の証人である。

わが中国革命も同様に、レーニンのこうした論断の最良の証人である。中国の人民、中国のプロレタリアートは中国共産党の指導のもとに二十二年の残酷な国内戦争を経てはじめて全国的な勝利をおさめ、権力を獲得したのだということを、人びとは忘れないであろう。

第一次大戦ののちにおける西方のプロレタリア革命の歴史がわれわれに教えているように、資本家諸君が直接に公然とではなくて、その召使である社会民主党の裏切り者たちに代理させて、権力をにぎつているようなときでも、かの卑劣な裏切り者たちは勿論いつでもブルジョアジーの意を体して、ブルジョア白衛軍の暴力を掩護し、プロレタリアートの革命戦士たちを血の海に投ずるのである。かつてのドイツがそうであつた。戦争にやぶれたドイツの大ブルジョアジーは、自己の権力を社会民主主義者ににぎらせた。権力の座についたばかりの社会民主党の政府はただちに1919年1月、ドイツの労働者階級にたいして血なまぐさい弾圧をおこなつた。レーニンから**「世界プロレタリアートの国際的なすぐれた人物」**、**「国際社会主義革命の不滅の領袖」**といわれたカール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルグなどはいかにして当時の社会民主主義者の暴力のもとに彼らの鮮血を流したかを思い出していただきたい。レーニンが言つたように、かの裏切り者――いわゆる「社会主義者」が資本主義制度とブルジョアジーの利益をまもるために**「おこなつたこうした人殺しのいやらしさ、下劣さ」**①はどういうものであつたか、思い出していただきたい。過去と現在の資本主義世界の血潮にまみ

---

① 「ヨーロッパとアメリカの労働者への手紙」

れた一切の事実のなかから、以前の修正主義者と現代修正主義者のいわゆる「資本主義の社会主義への平和的成長伸展」という一連のでたらめな言種を思い出していただきたい。

以上のべたところによると、われわれマルクス・レーニン主義者はたとえ平和的発展の可能性のある条件のもとでも平和的移行の方針を拒絶するということになるのであろうか？　いな、決してそうではない。

周知のように、科学的共産主義の偉大な創始者の一人であるエンゲルスは「共産主義の原理」という有名な著書のなかで、「私的所有制の廃止は平和な道行きでやられるであろうか？」という問題に答えている。

エンゲルスはつぎのようにこたえている。

「それはのぞましいことであろう。そして共産主義者は、そうすることに反対だとはあまり考えていない。共産主義者は、あらゆる陰謀は無益であるばかりか、むしろ有害でさえあるということをよく知つている。また、革命というものは、勝手にひきおこせるものではないし、また、注文どおりにやれるものでもない。それはどんなところでも、個々の党派とか階級全体とかの意志や指導とはまつたく関係のない各種の情勢の必然的な結果としておこるものだということをも彼らはよく知つている。しかしながら、彼らはまた、ほとんどすべての文明国で、プロレタリアートの発展がひどくおさえつけられているということ、また共産主義者の反対者がそうしているのは、あらんかぎりの方法をつくして革命を引きおこすことにほかならないということも知つている……」

エンゲルスのこの言葉は百年あまりも以前に書かれたものであるが、今日もなおわれわれが読んでみていかに新鮮なものを感じることであろう！

人びとにいつそうよく知られているように、ロシア二月革命後の一時期、当時の特殊条件によつて、レーニンは革命の平和的発展の方針をとつた。レーニンは、これを**「革命の歴史上きわめてまれに見る機会」**①であると考えた。彼はこの機会をがつちりとにぎつた。しかし、ブルジョア臨時政府と白衛軍はこうした革命の平和的発展の可能性を破壊し、七月の平和的な大衆デモのさいに、ペテルグラードの街路を労働者と兵士たちの血で染めた。したがつて、レーニンは指摘したのである。**「平和的な発展の道は不可能にされてしまつた。非平和的な、もつとも苦痛の多い道がはじまつた。」**②と。

また、人びとによく知られているように、中国の抗日戦争が終りをつげてのち、全国の人民がみな平和を熱望していたとき、わが党は国民党と平和交渉をおこない、平和な道をつうじて中国の社会的、政治的改革を実現しようと試み、1946年、国民党とのあいだに国内の平和を実行することについての協定をむすんだ。しかし、国民党反動派は全国人民の意志にそむいて、この協定を破棄し、アメリカ帝国主義の支持のもとに全国的な大規模の内戦をおこした。このため、中国人民はやむなく革命戦争をおこなわざるをえなくなつたのである。われわれは平和的な改革をめざすにあたつても、警戒心をゆるめず、人民の武装を放棄せず、十分な準備をととのえていたので、戦争は決して人民をおどしあげることができず、かえつて戦争をひきおこしたものが当然のむくいをうけたのであつた。

もしもプロレタリアートが平和的な方法で権力を獲得し、社会主義へ移行することができるなら、それは人民にとつて最も有利である。こうした可能性があるのに、この可能性を利用しないのはまちがつている。

---

① 「革命の任務」
② 「スローガンについて」

共産主義者は、「革命の平和的発展」のこうした機会がありさえすれば、かならずレーニンのようにこれをしつかりとつかんで、社会主義革命の目的を実現しなければならない。しかし、こうした機会は総じて、レーニンものべているように、**「革命の歴史上きわめてまれに見る機会」**である。もし一国の範囲内で、ある地方の権力がすでに革命勢力に包囲されているような場合、あるいは全世界の範囲で、ある資本主義国が社会主義に包囲されているような場合、こうした情勢のもとでは、革命の平和的発展の機会のあらわれる可能性はわりに大きいだろう。しかし、こうした情勢のもとでも革命の平和的発展が唯一の可能性であると考えては絶対にならないのであつて、同時に革命の非平和的な発展というもうひとつの可能性についても準備をととのえておくべきである。たとえば、中国大陸が解放されてのち、奴隷主と農奴主が支配しているごく一部の地区は、すでに絶対優勢な人民の革命勢力に包囲されていたにもかかわらず、「窮鼠、猫をかむ」という中国のことわざのように、そこの一にぎりの最も反動的な奴隷主と農奴主はやはり最後のあがきをつづけ、平和な改革を拒絶して、武装叛乱をおこなつたのであり、こうした叛乱が平定されてのちにはじめて、社会制度の改革を実行することができたのである。

帝国主義国、帝国主義者がその野蛮な食人制度をまもろうとして、かつて見ないほど完全に武装をととのえている現在、事態ははたして現代修正主義者の言うように、帝国主義はすでに自国のプロレタリアート、自国の人民、被抑圧民族にたいして非常に「平和的」になり、したがつて、レーニンが二月革命ののちにのべたあの**「革命の歴史上まれに見る機会」**が今後はたして世界のプロレタリアートと一切の被抑圧人民のつねに遭遇する状態となるなどと言えるだろうか？　したがつてまた、レーニンののべた**「まれに見る機会」**が今後はたして資本主義国のプロレタリアートにとつて容易につかみうる機会となるだろうか？　こうしたさまざまな論法はすべて全く根拠がないものであると、われわれは考える。

マルクス・レーニン主義者はみな、いつさいの支配階級の武力はまず第一に自国の人民を抑圧するためのものであるというこの真理を忘れてはならない。帝国主義者は、自国の人民を抑圧するという基礎のうえに立つてはじめて、他国を抑圧することができ、侵略をおこすことができ、不義の戦争をおこなうことができるのである。彼らは、自国の人民を抑圧するためには、反動的な武力を維持し、強化しなければならない。レーニンは1905年のロシア革命のさい、**「常備軍は国外の敵とたたかうために役立つよりも、むしろ国内の敵とたたかうために、役立つている」**①と書いている。搾取階級が支配的地位をしめている一切の国家、一切の資本主義国についてみれば、この論点は正しいであろうか？　当時は正しかつたが、現在ではすでに誤つているる、と言えであろうか？　われわれの見るところでは、この真理は今日もなお論駁しえないものであり、しかも、事実はその正しさをいよいよはつきりと立証している。厳密に言つて、いかなる国のプロレタリアートも、もしこの点を見きわめないならば、自己を解放する道をみつけることができないであろう。

レーニンはその著「国家と革命」のなかで、ブルジョアジーの国家機構を粉砕するという一点に革命の問題をしぼつている。彼はマルクスの著書「フランスの内戦」の最も重要ないくつかの個所を引用し、そのなかで、**「国家権力は1848年から1849年にいたる革命ののちには、『労働にたいする資本の戦争の全国的な武器』となつている」**と書いている。ブルジョア権力が労働にたいして戦争をすすめるための主な機関は、その常備軍にほかならない。したがつて、**「コンミユンの第一の布告は、常**

① 「軍隊と革命」

備軍を廃止し、そのかわりに武装した人民をおくことであつた。」

こうしたわけで、われわれの問題は、結局のところやはりパリ・コンミユンの原則に立ちかえつてくる。そして、まさしくマルクスがのべているとおり、コンミユンの原則は永久的なものであり、消し去ることのできないものである。

マルクスは十九世紀の七十年代にイギリスとアメリカを例外と見なし、これら両国は「平和な」道を通つて社会主義へ移行する可能性があると考えた。なぜなら、当時、これら両国の軍国主義と官僚制度はまだあまり発展をとげていなかつたからである。しかし、帝国主義の時代になると、レーニンに言わせれば、「**マルクスのいうこの例外はすでに効力をうしなつている**」。なぜなら、これら両国は、「**あらゆるものを自分に従属させ、あらゆるものを抑圧する官僚的・軍閥機関という、全ヨーロツパ的な、けがらわしい、血なまぐさいどろ沼に完全にころげおちた**」①からである。これは、レーニンが当時の日和見主義者と論戦をかわした一つの焦点であつた。カウツキーに代表される日和見主義者は、マルクスのあの「すでに効力をうしなつている」命題を歪曲して、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁に反対し、つまり、プロレタリアートは解放をかちとるためには革命の武力と武力革命を必要とするということに反対しようとくわだてた。レーニンはカウツキーにつぎのような回答をあたえている。

> **「プロレタリアートの革命的独裁は、ブルジヨアジーにたいする暴力手段である、この暴力手段はマルクスとエンゲルスが非常にくわしく、またなんども説明したように、軍閥機関と官僚制度が存在するために、とくに必要になるのである。ところが、マルクスがこ**

① 「国家と革命」

の意見を発表した十九世紀の七十年代には、まさにイギリスとアメリカにこれらの機関がなかつたのである。（ところが、いまでは、それが、イギリスにもアメリカにもある）。」①

ここからもわかるように、プロレタリアートが武力革命の手段にうつたえるのは、やむなくそうするのである。マルクス主義者はもともと平和な道を通つて社会主義へ移行することを望んでいる。平和な道が見つかりさえすれば、マルクス・レーニン主義者はこの道を放棄しないであろう。しかし、ブルジヨアジーが強大な軍国主義と官僚制度という抑圧機関を擁しているばあい、ブルジヨアジーの目的はこの道をふさぐことにあるのである。

上に引用した言葉はレーニンが1918年11月に書いたものである。では、現在の状況はどうであろうか？　現代修正主義者の言うように、レーニンのこうした言葉は歴史上では効力をもちえたが、現在ではすでに効力をうしなつたということになるのであろうか？　だれもが知つているように、どの資本主義国もほとんど例外なく、とくにアメリカを頭とする幾つかの帝国主義列強のばあいはとりわけ、その軍国主義と官僚制度の抑圧機関、なかんずくその軍事機関の強化に血道をあげているというのが現在の状況である。

1957年11月モスクワでひらかれた社会主義諸国共産党・労働者党代表者会議の宣言にはつぎのようにのべてある。

> **「レーニン主義がわれわれにおしえ、歴史の経験が実証しているように、支配階級はけつして自発的に権力をゆずりわたすものではない。かくして、階級闘争の激しさと、取られる形態とは、プロレタリアートの側よりもむしろ、圧倒的大多数の人民の意志にたいし**

① 「プロレタリア革命と背教者カウツキー」

てむけられる反動ブロックの抵抗の程度に左右され、社会主義をめざす闘争のあれこれの段階に反動ブロックが暴力を行使するか否かに左右されるのである。」

これは、レーニンの死後数十年間における国際プロレタリアートの闘争経験のあらたな総括である。

問題はけつしてプロレタリアートが平和的な変革をすすめることを望むか望まないかということではなく、ブルジョアジーがこうした平和的変革をうけいれるかうけいれないかということである。レーニンの教え子としては、この問題に対しただこういう見方をする以外にない。

それゆえ、平和的移行についての空論によつて人民の革命的意志を麻痺させる現代修正主義者とは反対に、マルクス・レーニン主義者は、それぞれの国の異なつた時期の具体的条件に応じてのみはじめて、社会主義への平和的移行の可能性の問題を提出しうると考えている。プロレタリアートは絶対に自己の思想、方針、全活動を一面的に根拠もなく、ブルジョアジーが平和的な変革をうけいれることを望むという予測のうえにたててはならないのであつて、かならず同時に両方のばあいの準備、つまり、革命の平和的な発展についても準備するし、革命の非平和的な発展についても準備をするようにしなければならない。いかに移行するか、武装蜂起によつて移行するか、それとも平和的に移行するか、これは社会主義国と資本主義国とのあいだの平和共存とは根本的にことなる別個の問題であり、各国の内政の問題であり、ただ各国の各時期における階級の力関係によつてのみ決定されうる問題であり、ただ各国の共産主義者自身のみが決定できる問題なのである。

五

レーニンは十月革命ののちの1919年、第二インタナショナルの歴史的

教訓にふれたことがある。彼は、第二インタナショナルの時期のプロレタリア運動は**「横へ幅ひろく発展していつたが、そのかわり、革命の水準の一時的な低下、日和見主義の一時的な強化を伴わないわけにはゆかなくなり、ついには第二インタナショナルを恥ずべき崩壊に立ちいたらしめた」**①とのべている。

日和見主義とは何か？　レーニンの言葉によれば**「日和見主義とは、一時的、局部的な利益をむさぼつて、根本的な利益を犠牲にすることである。」**②

革命の水準をひきさげるというのはどういうことか？　それは、つまり、日和見主義者が大衆にその注意力を日常的、一時的、局部的な利益のうえにそそがせ、長期的、根本的、全面的な利益を忘れさせようとはかることである。

マルクス・レーニン主義者は、長期的、根本的、全面的な利益の見地から議会闘争の問題を見るべきである、と考えている。

レーニンはわれわれに議会闘争の局限性について語つたが、しかし、彼はまた、共産主義者はかならず狭いセクト主義の誤りをさける必要があると警告している。レーニンは「共産主義運動における『左翼』小児病」という名著のなかで、いかなる条件のもとでは議会をボイコットすることが正しいか、いかなる条件のもとでは議会をボイコットすることが誤りであるかというロシア革命の経験について説明した。レーニンは、どのプロレタリアートの政党もすべて各種の可能な機会を利用して必要な議会闘争に参加すべきである、と見なしている。もしも共産党員がただたんに革命の空談義をやるだけで、不撓不屈のねばりづよい活動をすることを望まず、必要な議会闘争をさけるならば、それは根本的に

① 「第三インタナショナルとその歴史上の地位」
② 「ロシア共産党（ボ）モスクヴ組織の活動分子の会合での演説」

誤りであつて、革命的プロレタリアートの事業にとつて害があるだけである。当時、レーニンは、ヨーロッパの一部の国々の共産党員が議会に参加することをこばんだ誤りを批判した。彼はつぎのようにのべている。

「議会への参加を『否定』することの大人気なさは、つぎの点にある。すなわち、このような『簡単な』、『手がるな』、革命的であるかに見える方法で、労働運動内部にあるブルジョア民主主義的な影響と闘争するというむずかしい任務を『解決』しようと考え、実際には、耳を掩うて鈴を盗み、困難にはただ目をとじるだけであつて、空談義だけで困難からのがれている点である。」

では、なぜ議会闘争に参加する必要があるのか？　レーニンの考えるところによれば、その目的は労働運動の内部におけるブルジョアジーの影響と闘うことにある、あるいは彼が別の個所でのべているように、**「その目的はまさしく自己の階級のおくれた層を教育することにあり、まさしく農村のなかの頭のひらけてない、抑圧された、愚昧な大衆を目ざめさせ、啓蒙することにある。」**

つまり、目的は大衆の政治水準と思想水準をたかめ、議会闘争と革命闘争を統一することにあるのであつて、逆にわれわれに自己の政治水準と思想水準を低下させ、議会闘争を革命闘争から遊離させるということにはないのである。

大衆と一体にならねばならないし、革命の水準を低下させてもならないということ、これこそレーニンがわれわれにプロレタリアートの闘争のなかでかならず堅持せよと教えた一つの根本原則である。

議会闘争に参加しなければならないし、ブルジョアジーの議会制度を盲信してもならない。それはなぜか？　なぜなら、たとえ労働者階級の政党が議会のなかで多数を獲得するか、あるいは議会のなかでの最大の政党になつたとしても、ブルジョアジーの軍閥的・官僚的国家機関がそ

つくりもとのままであるかぎり、議会もまた依然としてブルジョア独裁の装飾品でありうるにすぎないからであり、また、ブルジョアジーの軍閥的・官僚的国家機関がそつくりもとのままであるかぎり、ブルジョアジーはいつでも自己の利益の必要にもとづいて、必要なときに議会解散の方法をとるほか、なお公開的あるいは舞台裏での各種の詭計をめぐらして、もともと議会のなかで最大の党であつた労働者階級の政党を少数派に変えてしまうとか、あるいは労働者階級の政党がたとえ選挙で以前より多くの票を獲得しても逆に議席を減らさせるとかすることができるからである。したがつて、ブルジョア独裁じたいが議会の選挙の票によつて変化をおこすなどということは、とても考えられない。また、プロレタリアートがどれだけかの議会選挙の票を獲得したからといつて、そこで平和的に社会主義へ移行する措置をとりうるなどということも、とても考えられない。一連の資本主義国の経験はすでに早くからこの点をあますところなく立証しており、第二次大戦後のヨーロッパとアジアの各国の経験もまたこの点をあらたに立証しているのである。

レーニンは、**「プロレタリアートは住民の多数者を自分の味方にかちとらなければ勝利することができない。だが、このかちとるということを、ブルジョアジーの支配下の選挙で多数を獲得することにかぎつたり、あるいはそれを条件としたりすることは、手のつけられない愚さをしめすものでなければ、労働者をまつたく欺瞞するものである」**。①とのべている。現代修正主義者は、レーニンのこの言い方は古くさくなつたと見なしている。しかし、われわれの目のまえにある生きた事実は、レーニンのこの言い方がいかなる国のプロレタリア革命家にとつてもなお依然として口に苦い良薬であることを証明しているのである。

---

① 「憲法制定議会の選挙とプロレタリアートの独裁」

革命の水準をひきさげるということは、とりもなおさず、マルクス・レーニン主義の理論水準をひきさげることであり、政治闘争を経済闘争にひきさげることであり、革命闘争を議会だけの闘争にひきさげることであり、一時的な利益のために原則を犠牲にして取引をすることである。

二十世紀のはじめ、レーニンはその著「何をなすべきか？」のなかで、「**マルクス主義の広はんな普及にともなつて理論的水準がある程度低下をきたした**」ということにすでに注意をうながしている。レーニンは、マルクスが「ゴータ綱領」についての書簡のなかでのべた意見、つまり、運動の実際的目的をみたすためには協定をむすぶがよい、けれども、原則を犠牲に取引するのをゆるしてはならない、理論上の「譲歩」をしてはならない、という意見を引用した。つづいて、レーニンはつぎのようなことを書いたが、この一節の言葉はいまではほとんどすべての共産主義者によく知られている。レーニンはつぎのように書いている。

> **「革命的理論なくしては革命的運動もありえない。流行の日和見主義の説教に、実際活動のもつとも狭い形態への熱中が表裏ともなつているような時代には、いかほど強く終始この思想を堅持してもたりないのである。」**

革命的マルクス主義者にとつて、これはいかに重要な示唆であろう。ロシアにおける全革命運動は、偉大なレーニンを先頭とするボルシエビキ党の、革命的マルクス主義の理論を堅持するというこの思想にみちびかれて、1917年10月に勝利をおさめたのであつた。

上述の問題について、中国共産党も二度にわたる経験をつんだ。第一回目は、1927年の革命の時期におけるものである。当時わが党と国民党との統一戦線にたいしてとられた陳独秀の日和見主義的政策は、共産党の当然もつべき原則的立場を失つたものにほかならず、原則のうえで共

産党を国民党までひきさげ、結果において革命を失敗させた。第二回目は、抗日戦争の時期におけるものである。中国共産党中央はマルクス・レーニン主義の立場を堅持し、共産党と国民党とのあいだの抗戦についての主張の原則上の食いちがいを暴露し、抗日の主張についての原則のうえで共産党は決して国民党に譲歩することはできないと考えていたのにたいし、王明によつて代表される右翼日和見主義は十年まえの陳独秀の誤りをくりかえして、原則のうえで共産党を国民党までひきさげようとしたのであつた。したがつて、わが全党は右翼日和見主義者ときわめて大がかりな論戦を展開した。毛沢東同志はつぎのようにのべている。

> **「……共産党員であつてこの原則性をわすれるならば、彼らは抗日戦争をただしく指導することができず、また国民党の一面性を克服する力をもたず、共産主義者を無原則の状態にひきおろし、共産党を国民党までひきおろすであろう。彼らは、神聖な民族革命戦争と祖国防衛の任務のうえで、罪をおかすであろう」。①**

わが党中央が原則のうえでいささかも譲歩せず、わが党と国民党との統一戦線にたいして連合もすれば闘争もするという政策をとつたというまさにこのことによつて、わが党の政治上、思想上の陣地は固められ、拡大され、また、民族革命統一戦線は固められ、拡大され、その結果、抗日戦争のなかで人民の力は強大となり、さらにまた、われわれは抗日戦争が終りをつげたのち、蔣介石反動派の大規模な攻撃を粉砕し、全国的な範囲で偉大な人民革命の勝利をおさめたのであつた。

中国革命の経験から見れば、プロレタリアートとブルジョアジーが政治上で協力しているときには、わが党内に右翼的な誤りがあらわれやすく、またプロレタリアートとブルジョアジーが政治上で決裂していると

---

① 「上海、太原陥落後の抗日戦争の情勢と任務」

きには、わが党内に「左」翼的な誤りがあらわれやすい。わが党は、中国革命を指導する過程で、「左」翼冒険主義に反対する闘争もたびたびおこなつてきた。「左」翼冒険主義者は、マルクス・レーニン主義の観点によつて中国の複雑な階級関係を正しく処理するということができず、それぞれちがつた歴史的時期に、それぞれちがつた階級にたいし、それぞれちがつた正しい政策をとらねばならぬということがわからず、単純にもただ闘争するだけで連合しないという誤つた政策を実行した。こうした「左」翼冒険主義の誤りを克服しなかつたならば、やはり中国革命は勝利をおさめることができなかつたであろう。

レーニン主義の観点によると、いかなる国のプロレタリアートも革命の勝利をおさめるには、真のマルクス・レーニン主義的党をもたねばならない。そして、この党はマルクス・レーニン主義の普遍的真理を自国の革命の具体的実践とうまくむすびつけることができ、各時期に正しく革命の対象をきめることができ、主力軍と同盟軍を組織する問題を解決することができ、誰に依拠し誰と団結するかという問題を解決することができねばならない。革命的プロレタリア政党は自階級の大衆にしつかりと依拠せねばならず、また農村の半プロレタリアートすなわち広はんな貧農にしつかりと依拠し、プロレタリアートの指導する労農同盟をうちたてねばならないのであつて、こうしたのちにはじめて、この同盟の基礎のうえに団結しうる一切の社会勢力と団結することができ、そしてまた、ちがつた国のちがつた時期における具体的状況に応じて、勤労人民と団結しうる非勤労人民との統一戦線をうちたてることができるのである。もしもそうしなければ、プロレタリアートは各段階で革命の勝利をおさめるという目的をとげることができないであろう。

現代修正主義者とブルジョアジーの一部の代表者は、たとえプロレタリアートの革命的政党がなく、またプロレタリアートの革命的政党の上

述のような一連の正しい政策がなくても、社会主義を実現することが可能であると人びとに思いこませようと企てている。これはでたらめきわまる論法であり、まつたくの欺瞞である。マルクスとエンゲルスの「共産党宣言」は、その当時さまざまの「社会主義」があつたということ、小ブルジョアジーの「社会主義」もあれば、ブルジョアジーの「社会主義」もあり、封建的な「社会主義」等々もあつたということを指摘している。現在では、マルクス・レーニン主義の勝利と資本主義制度の腐敗によつて、世界各国でいよいよ多くの人民大衆が社会主義に心をよせており、一部の国の搾取階級のあいだでも、さまざまの色あいの「社会主義」なるものがいよいよ多くあらわれてきている。まさしくエンゲルスがのべたように、こうしたいわゆる「社会主義者」も「**種々な万能薬とあらゆる種類のつぎはぎ細工をもちいて、資本や利潤をすこしもきずつけずに、社会の弊害をとりのぞこうとし**」ており、かれらは「**労働者運動の外部にあつて、むしろ『教養ある』階級に支持をもとめようと望んで**」①いたのである。彼らは、「社会主義」の看板をかかげて資本主義の実際行動をとつているにすぎない。こうした情勢のもとでは、マルクス・レーニン主義の革命的原則を堅持して、革命の水準をひきさげる一切の傾向、とくに修正主義、右翼日和見主義と闘うことは、きわめて重要な意義をもつているのである。

当面の世界平和をまもる問題については、イデオロギーの論争はもはや必要がないなどと言うものもいる。あるいはまた、共産主義者と社会民主主義者とのあいだにはもはや方針のくいちがいがないなどと言うものもいる。これは、共産党の思想水準と政治水準をブルジョアジーと社会民主主義者の水準までひきさげるにひとしい。こうした論法はとりも

① 「『共産党宣言』1890年ドイツ語版への序文」

なおさず、現代修正主義の影響をうけて、自己をマルクス・レーニン主義の陣地から脱離させたものにほかならない。

平和をかちとる闘争と社会主義をかちとる闘争、これは二種類のことなつた闘争である。もしもこの二種類のことなつた闘争を適切に区別しないならば、それは誤りである。平和運動に参加する社会層は当然きわめて複雑であつて、そのなかにはブルジョアジーの平和主義者もふくまれている。われわれ共産主義者は世界平和をまもる最前線に立つており、帝国主義戦争に反対し、平和共存を主張し、核兵器に反対する最前線に立つている。こうした運動のなかで、われわれは構成の複雑な多くの社会層とともに、平和をかちとるため必要な協定をむすばねばならない。しかし、われわれは同時にまた労働者階級の政党の原則性を保持せねばならないのであつて、自己の政治水準や思想水準をひきさげてはならず、平和をかちとる闘争のなかで自己をブルジョアジーの平和主義者の水準までひきさげてはならない。ここにこそ、連合もすれば批判もするという問題が存在するのである。

現代修正主義者の口にする「平和」は、帝国主義の戦争準備に粉飾をほどこすためのものであり、ずつと昔にレーニンから斥けられた、旧い日和見主義者のいわゆる「超帝国主義」の論調をくりかえすものであり、また二種類のことなる制度をもつ国々の平和共存についてのわれわれ共産主義者の政策を曲解して各国内部の人民革命を根絶しようとするものである。旧い修正主義者ベルンシユタインには、「運動がすべてで、目的はない」という有名な恥ずべき言葉がある。現代修正主義者にも類似の論法があつて、それはつまり、平和運動がすべてで、目的はないというのである。したがつて、彼らがのべたてる「平和」というのは、帝国主義者が一定の歴史的条件のもとでうけいれることのできる「平和」に全くかぎられており、各国人民の革命の水準をひきさげて、各国人民

に革命の闘志をうしなわせようとするものにほかならない。

われわれ共産主義者は、世界平和をまもるために闘い、平和共存の政策の実現をかちとるために闘つている。同時に、われわれは被抑圧民族の帝国主義に反対する革命戦争を支持しており、われわれは抑圧された人民の、自己の解放をかちとり、社会進歩をかちとる革命戦争を支持している。なぜなら、これらの革命戦争はすべて正義にもとづくものだからである。われわれはまた、当然、資本主義的帝国主義制度は現代の戦争の根源であるというレーニンの論点をひきつづき大衆にむかつて説明しなければならず、われわれの闘争の最後の目的は社会主義と共産主義を資本主義的帝国主義にとつてかわらせることであるというマルクス・レーニン主義の論点をひきつづき大衆にむかつて説明しなければならない。大衆のまえで、われわれはわれわれ自身の原則をおおいかくしてはならない。

六

われわれは現在、帝国主義制度がいちだんと崩壊をはやめ、全世界人民の勝利と覚醒がたえまなく発展している偉大な新時代に生きている。

現在、全世界の各国人民は前よりずつと幸運にめぐまれている。なぜなら、十月革命後の四十余年のあいだに、すでに人類の三分の一が資本主義的帝国主義の圧迫を脱し、一連の社会主義国をうちたてているからである。これらの国々では、国内の恒久平和の生活が真にうちたてられており、これらの国々はいまや全人類の運命に影響をおよぼしており、全世界の全面的な恒久平和の日の到来を大いに早めるであろう。

すべての社会主義国のなかで、全社会主義陣営のなかで、最前列に立つているのは偉大なソ連であり、レーニンとソ連共産党が労働者農民を指導してうちたてた最初の社会主義国家である。ソ連では、すでにレー

ニンの理想が実現され、すでに社会主義がうちたてられており、いまやフルシチョフ同志を先頭とするソ連共産党中央とソ連政府の指導のもとに、共産主義の全面的な建設という偉大な時期がはじまつている。ソ連の英雄的なすばらしい英知をもつた労働者、農民、知識人は、共産主義をうちたてるというこの偉大な目標をめざす闘争のなかで偉大な労働の新しい高まりをまきおこしている。

われわれ中国の共産主義者と中国人民は、レーニン主義の故郷——ソ連の新しい成果のひとつびとつに歓呼をおくつている。

中国共産党は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を中国革命の具体的実践とむすびつけ、全国人民を指導して、偉大な人民革命の勝利をかちとり、さらにレーニンの指摘した社会主義革命と社会主義建設という共同の大道にそつて社会主義革命を最後までおしすすめ、すでに社会主義建設の各戦線にわたつて偉大な勝利をおさめはじめている。中国共産党中央は、レーニンの原則にもとづき、わが国の条件下で、社会主義建設の総路線、大躍進、人民公社という正しい方針を創造的にわが国人民のためにうち出し、全国の大衆の創造的な革命精神をふるいたたせており、これによつてわが国の面貌はいま日進月歩の勢いであらためられつつある。

東ヨーロツパの社会主義諸国、アジアの他の社会主義諸国もおなじく、われわれにとつて共同のレーニン主義の旗のもとに、社会主義建設事業のなかで、飛躍的な成果をおさめている。

レーニン主義は無敵の旗である。世界の勤労者はこの偉大な旗をしつかと握りしめている。それは真理を掌握していることを意味し、自己のためにたえず勝利の道をきりひらいていることを意味するものである。

われわれは永遠にレーニンを記念する。現代修正主義者がレーニン主義というこの国際プロレタリアートの偉大な旗を汚そうとねらつている

ときにあたつて、われわれの任務はとりもなおさずレーニン主義を防衛することである。

誰もが記憶しているように、レーニンはかれの名著「国家と革命」のなかで、歴史上における各被抑圧階級の解放闘争のなかでの革命的思想家と指導者の学説がどんな目にあつたかについて述べている。レーニンは、かれらの死後には、歪曲があらわれ、**「革命的学説の内容を去勢し、その革命的な切つ先をすりへらし、これを卑俗化する」**であろう、と述べている。つづいてレーニンは、**「いま、ブルジョアジーと労働運動内の日和見主義者は、こういうふうにマルクス主義を『仕上げる』面で、一致する方向にむかつている。かれらは学説の革命的な側面、その革命的な精神をわすれ、抹殺し、歪曲している。そして、ブルジョアジーにうけいれられるもの、あるいはうけいれられるように見えるものを、前面におしだし、礼讃している」**と述べた。その通りである。いま、われわれはまたしてもアメリカ帝国主義の若干の代表者にぶつかつている。かれらはまたしても神父の顔付をしてあらわれ、マルクスは「十九世紀の偉大な思想家」であつたとさえ言い、マルクスが十九世紀に資本主義の寿命は長くないといつた予言は「根拠があり」、「正しかつた」と認めてさえいるが、これらの神父たちが言うことには、二十世紀になると、とりわけ最近の数十年には、マルクス主義は正しくなくなつた、なぜなら、資本主義はすでに時代おくれとなり、もはや存在を停止した、すくなくともアメリカではそうだ、などと言つているのである。われわれは、帝国主義の神父連のこうしたたわごとを耳にすると、現代修正主義者の言葉を聞く思いがする、かれらの言葉はほぼ一致を見せているのである。しかし、現代修正主義者は、マルクスの学説を歪曲するにとどまらず、さらに、マルクス主義の偉大な継承者であり、発展者であるレーニンの学説をも歪曲しているのである。

モスクワ会議の宣言は、「**いまの条件下においては、主要な危険は修正主義であり、別の言葉でいえば右翼日和見主義である。**」と指摘している。ところがこのモスクワ会議の判断はもはや今日の状況に適合しないと言う者がいる。われわれは、そうした論法は誤りであると考える。こうした論法は、修正主義というこの主要な危険にたいして闘争をおこなうことの重要性をゆるがせにさせることになり、プロレタリアートの革命事業にとつてきわめて有害である。かつて、十九世紀の七十年代から、資本主義の「平和」な発展の一時期があり、その時期にベルンシュタインの旧修正主義が生まれたのと同様に、現在、帝国主義が平和共存を受け入れざるを得なくなつたという状態下において、多くの資本主義国がまだある種の「国内平和」の状態におかれているという状況下においては、修正主義の思潮はもつとも容易にはびこり、氾濫する。したがつて、われわれは労働運動内におけるこうした主要な危険にたいして、たえず高度の警戒心を保持しないわけにはいかないのである。

レーニンの教え子として、レーニン主義者としてわれわれは、レーニン主義の学説を歪曲し分断しようとする現代修正主義者の企図を全面的に粉砕しなければならない。

レーニン主義はプロレタリアートのまとまづた革命的学説であり、マルクス、エンゲルスの亡きあと、ひきつづきプロレタリア思想を表現した、まとまつた革命的世界観である。このまとまつた革命の学説、まとまつた革命的世界観は、これを歪曲したり、分断したりすることはできない。われわれの見るところでは、レーニン主義を歪曲し分断しようとする現代修正主義者の企図は、帝国主義がその末路において必死のあがきをしている一種の現われにすぎない。ソ連における共産主義建設の不断の勝利をまえにし、社会主義諸国の社会主義建設の不断の勝利をまえにし、ソ連を先頭とする社会主義陣営の日ましに強化される団結をまえにし、全世界人民が日ましに目ざめ、資本主義的帝国主義の鉄鎖を脱するためたえずおこなつている英雄的な闘争をまえにしては、チトーども修正主義者の企図は、まつたく徒労におわるであろう。

偉大なレーニン主義万歳！

（1960年4月16日第8期「紅旗」より）

偉大なレーニンの道に沿って前進せよ

人民日報編集部

全世界のめざめた勤労大衆は、今日こぞつて、偉大なプロレタリア革命の指導者であり、教師であるレーニンの生誕九十周年を記念している。

レーニンは、ソ連共産党の創始者であり、世界最初の社会主義国家ソ連の創立者であり、マルクス、エンゲルス以後における国際共産主義運動のもつとも偉大な指導者である。レーニンは、哲学、政治経済学、科学的社会主義の理論の面で、マルクス主義を新しい段階へ、すなわちレーニン主義の段階へと発展させた。レーニン主義は帝国主義とプロレタリア革命の時代におけるマルクス主義である。

レーニンの指導した十月社会主義革命の勝利によつて、世界の六分の一をしめる土地が、資本主義の支配をはなれた。それからおよそ三十年のち、ヨーロツパとアジアに一連の新しい社会主義国が生まれ、強大な社会主義陣営を形づくつた。中国革命が勝利してのち、社会主義陣営はすでに世界の陸地の四分の一以上、人口の三分の一以上を擁している。世界の階級的力関係は、プロレタリアートと勤労大衆にとつてひじように有利に変つてきている。

中国人民はレーニンの理論と事業にひじような親しみを覚えているが、これは中国人民がまさしくレーニン主義から自己の解放の道をさがしあてたからである。まだ中国ではごくわずかな人しかレーニンを知らなかつたころ、レーニンはその著書のなかで、中国の革命闘争の偉大な意義と偉大な前途を一再ならず指摘している。はやくも1913年にレーニンは、「カール・マルクスの学説の歴史的運命」という論文のなかで、アジアは「**もつとも偉大な世界的嵐の新しい源泉**」であるという有名な断定をうち出した。つづいて、毛沢東同志の言うように、「**十月革命の一発の砲声が、われわれにマルクス・レーニン主義をおくりとどけてきた**」。マルクス・レーニン主義をもち、マルクス・レーニン主義的な、プロレタリアートの革命政党をもつようになつたからこそ、中国革命は新たな段階にはいつたのである。

レーニンは、帝国主義はプロレタリア革命の前夜であり、帝国主義は必然的に国際プロレタリアートと被圧迫民族の共同闘争のなかで滅亡すること、国家は階級支配の暴力機構であり、プロレタリアートはかならず革命的暴力をもつて反革命的暴力をくつがえし、ブルジョアジーの軍閥・官僚的国家機構を粉砕し、プロレタリアート独裁の新しい国家をうちたてなければならないこと、プロレタリアートはかならず農民との同盟をかためるために努力し、土地問題を徹底的に解決し、民主主義革命において指導権を獲得することに努め、民族ブルジョアジーと同盟を結ぶさいにはかならず自己の独立性を保持しなければならないこと（中国の通俗的な言い方によれば、連合もすれば、闘争もすること）、かならず新しい型の、プロレタリアートの革命的政党をうちたて、この党はかならず、マルクス主義に違反する修正主義に反対し、共産主義運動中における左翼冒険主義を克服し、かならずだんことして大衆を信頼し、大衆にたよらなければならないことを指摘している。レーニンのこれらの学説は、全世界のプロレタリアートを武装し、また中国のプロレタリアートを武装した。マルクス・レーニン主義の普遍的真理が、急速に中国のプロレタリアートと革命的人民のうけいれるところとなつたのは、主として、ひどい災厄をこうむつていた中国人民が、だんこたる闘争をすすめて解放を求めるいがいには、他のいかなる道もなかつたからであ

る。帝国主義、封建主義、官僚資本主義のきわめて残酷な、きわめて野蛮な支配下にあつた旧中国では、プロレタリアートと人民大衆が、帝国主義の「好意」などというものにどうして幻想をもち得ただろうか？反動支配階級が自発的に権力を人民にゆずつてくれるといつた幻想をどうしていだき得ただろうか？

中国のプロレタリアートの政党——共産党とその指導者毛沢東同志は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を創造的に運用し、これを中国革命の具体的実際と結びあわせて、中国の革命闘争をたえずおしすすめてきた。蔣介石を代表とするブルジョアジーの反動派が革命を裏切つて、人民を血の海に投じた時にあたつて、中国のプロレタリアートとその政党は、革命的暴力によつて反革命的暴力に抵抗せざるをえず、二十二年にわたる革命戦争をへて、帝国主義と国民党反動派の暗黒支配をついにくつがえし、プロレタリアートの指導する人民民主主義独裁をうちたて、中国人民を社会主義のひろびろとした道へとみちびいた。

中国革命の勝利は、マルクス・レーニン主義の中国における勝利である。全世界および中国においてマルクス・レーニン主義がおさめた数々の勝利によつて、マルクス・レーニン主義の真理はくつがえすこともうち破ることもできないものであり、全世界のすべての被圧迫階級とすべての被圧迫人民が解放をかちとるための行動の指針であり、全世界の人民が社会主義と共産主義へすすむための行動の指針であることが、ますますはつきりと立証された。

レーニンの生誕九十周年を記念するにあたつて、中国人民のおもな任務はなにか？　われわれは、主として三つの面にわたる任務、すなわち、社会主義を建設する任務、世界の平和をかちとる任務、世界の友と団結する任務があると考える。

中国人民の当面の第一の任務は、わが国の社会主義建設を急速に発展させ、長くない期間内に、わが国を高度に発展した現代的工業、現代的農業、現代的科学・文化をもつ偉大な社会主義国へときずきあげることである。この任務をなしとげることは、中国人民にとつて決定的な意義をもつだけでなく、世界人民の平和と社会主義事業にとつても、いちじるしい、きわめて大きな意義をもつている。

毛沢東同志を先頭とする中国共産党中央は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を、わが国の社会主義革命と社会主義建設の具体的な実際と結合して、大いに意気込み、つねに高い目標をめざし、多く、はやく、りつぱに、むだなく社会主義を建設するという総路線をうちだした。この総路線は、わが国の人民がこの偉大な任務を成功裏に実現するうえでのもつとも重要な保証である。

この偉大な任務をなしとげるために、わが国の人民は、その第一歩として、十年にみたない期間内に、おもな工業製品の生産量の面でイギリスに追いつき追いこし、完全にととのつた工業体系を基本的にきずきあげるようにし、1956年から1967年にいたる全国農業発展要綱を期限前に実現し、農業の機械化、水利化と相当の程度の電化を基本的に実現するようにし、文化革命をすすめ、長くない期間内に中・小学校教育と業余教育を基本的に普及させ、1956年から1967年にいたる科学・技術発展のための長期計画をくりあげ完遂するために努力しなければならない。それと同時に経済戦線、政治戦線、思想戦線における社会主義革命をひきつづきやりとげて、すべての領域において社会主義が資本主義に徹底的にうちかつようにするとともに、人民大衆の社会主義的、共産主義的自覚を大いに高めなければならない。いま、わが国の人民は、1960年の国

民経済計画を完遂し、超過完遂するために、技術革新、技術革命を中心とする嵐のような増産節約運動をくりひろげており、今年じゆうに銑鉄の生産量が2750万トンに、鋼鉄の生産量が1840万トンに、出炭量が4億2500万トンに、発電量が555億キロワット時以上にそれぞれ達するようにし、食糧と綿花の生産高をそれぞれ10パーセント前後ふやし、これによつて今年の工農業生産総額を昨年より23パーセントふやすために奮闘している。

中国人民が強大な社会主義国を急速にきずきあげうるか否かについて、アメリカ帝国主義者はあらんかぎりの中傷と嘲笑をあびせかけている。遠くは、もとのアメリカ国務長官ダレスのごとく、彼は1958年11月、「こうした努力が成功し、あるいは持続されうるとは信じがたい」などとのべている。近くは、現在の国務次官補パーソンズのごとく、彼は今年の二月にまた、こともあろうに、中国の工業化をはやめる運動は「この政権の内部からの崩壊をまねくであろう」とのべている。ところが、不思議なことに、帝国主義者の中傷が悪どくなればなるほど、中国人民の革命的熱情はますます高まり、建設の意気込みはますます大きくなつてくる。中国の経済情勢、中国人民の政治的団結は、一年一年といつそう良くなつている。げんざい、広はんな大衆のなかに、われわれがわが偉大な建設計画をかならずくりあげて超過完遂できることを疑うものはいないのである。

マルクス・レーニン主義は、社会主義制度のもとでは、社会的生産力が偉大な解放をかちとり、人民の積極性、創意性が偉大な解放をかちとりうることを一貫して指摘している。レーニンは、社会主義社会の生活は歴史上いまだかつてない、大多数の住民、ないしは全住民がのこらず参加する真に大衆的な運動であると考えていた。レーニンは、大衆の生気にみちあふれた創造力こそ社会主義社会の基本的要素であり、しか

もこうした創造的な才幹は労働者と農民のなかに無限にあると考えていた。レーニンは、マルクス主義の「**もつとも深遠な、それと同時にもつとも簡単明瞭な**」原理をつぎのようにえがき出している。「**歴史的意義のある行動の規模は大きければ大きいほど、その範囲が広ければ広いほど、こうした行動に参加する人数はますます多く、逆に言えば、われわれが遂行しようと欲する改造が深刻であればあるほど、そうした改造に関心をもたせ、自覚的態度をとらせ、つぎからつぎへと何百万、何千万の人びとにこうした改造の必要性を説得しなければならない。要するにわれわれの革命が、他のすべての革命をはるかにしりえに引きはなしたのはそれが、以前には、国家建設になんら関心をもたなかつた何千万の人びとを、ソビエト権力を通じてこの建設に積極的に参加するようにふるいたたせたからである。**」（「第八回全ロシア・ソビエト大会における人民委員会議の活動についての報告。」）

わが国の発展速度は、ソ連やその他の社会主義国と同じように、資本主義国にかつて見られた発展速度をはるかに引きはなして、中国共産党員の言い方にしたがえば、躍進的な速度で前進できるとわれわれは確信している。なぜなら、わが党によつて定められた、大いに意気込み、つねに高い目標をめざし、多く、はやく、りつぱに、むだなく社会主義を建設するという総路線、われわれがいま実行している、工業と農業の同時発展、重工業と軽工業の同時発展、中央の工業と地方の工業の同時発展、大型企業と中型・小型企業の同時発展、新式の方法による生産と旧式の方法による生産の同時発展など一組のまとまつた「二本の脚で歩く」方針、わが国でいまめざましい勢いでくりひろげられている機械化、半機械化、自動化、半自動化の技術革新、技術革命の大衆運動、わが国の農村における人民公社の強化と発展、当面の都市における人民公社の普遍的な設立によつて、まさしくレーニンの指摘したように、い

く千百万の人民がもつとも広はんに動員され、最高度の積極性と創意性を発揮してわが国の建設事業に参加しているからである。中国はソ連やその他の社会主義国とおなじように、社会主義建設の共通の法則にしたがつて自己の経済建設を発展させつつあり、そして中国が社会主義建設の問題のうえでとつている一連の具体的方針は、まさしくレーニン主義の普遍的真理と中国の具体的実際とが結合した結果うまれたものである。

野暮くさい西方諸国のブルジョアジーは、いぜんソ連の高速度の社会主義建設にたいして喧しくわめきたてたが、こんどはまたわれわれの高速度の社会主義建設にたいして、われわれの総路線、大躍進、人民公社にたいして、ひつきりなしに喧しくわめきたてている。偉大なレーニンは、その逝去の一年まえに書いた有名な論文「わが国の革命について」のなかで、はやくもこれらの愚か者どもに致命的な痛撃をくわえている。レーニンはこう指摘している。「**ロシアは、文明国と、この戦争（第一次世界大戦を指す）によつて決定的に文明の列に引きいれられた全東方諸国、ヨーロツパいがいの諸国との間にたつており、そのために若干の特徴をあらわすことができ、またあらわさなければならなかつた。これらの特徴はもちろん世界の発展の一般的路線からはみだしてはいないが、ロシア革命を明らかに西ヨーロツパ諸国のこれまでのすべての革命と区別しており、しかも東方諸国へ革命がうつるにあたつていくつかの部分的な新しいものをもちこむ。**」レーニンはこう反問している。「**まつたく活路のない境遇が、労働者、農民の力を十倍にふやし、それによつてわれわれが西ヨーロツパの他のすべての国家のばあいとは別な行き方で文明を発展させる根本条件をつくれるようにしてくれるならば、どうであろうか？**」と。レーニンはまた次のようにくりかえし予言している。「**その人口がはるかに多く、社会の状況がくらべもののないほど複雑な東方諸国のこんごの革命は、疑いもなく、ロシアの革命よりも多くの特色をもたらすだろうということを、わがヨーロツパの俗物たちは、夢にもおもわないだろう。**」と。

事実はまさにこの通りではないだろうか？　ソ連は、すべての西方諸国とはちがつた方法をとり、すでに飛躍的な速度で、ごく短い期間内に、経済発展の水準の面で西欧のすべての資本主義国をしのぐとともに、いまやアメリカにせまり、ある面ではすでにアメリカを追いこしはじめているではないか？　同様に、中国では、「経済的に立ちおくれ、文化的にも白紙にちかい」、まつたく活路のない境遇におかれ、数十年にわたる闘争の鍛練と経験の蓄積にくわえて、ソ連を先頭とする強大な社会主義陣営の援助とソ連の四十年にわたる建設の経験を手本として、これまた中国の労働者、農民の力を十倍にふやし、西方の他のすべての国家とは別のゆき方で現代的工業、現代的農業、現代的科学・文化をめざして飛躍的な速度で猛進しているではないか？　西方のブルジョアジーがわれわれは失敗するとののしり騒いでいるときに、われわれの隊伍のなかにまで西方ブルジョアジーの鳴きまねをするものがいて、言うにこと欠き、われわれの総路線、大躍進、人民公社は「小ブルジョアジーの熱狂性」の産物であると言い、これがまぎれもなくマルクス・レーニン主義の革命性の産物であることを認識しないでいる。かれらは待つて見ておればよかろう。十年も待てば、かれらはいやでもはつきり見わけがつくだろう。総じて、外国と中国とを問わず、形而上学を頭いつぱいつめこんだかの俗物どもは、まさしくレーニンが言つているように、ブルジョア的諸関係の「常態」を少しも動かすことのできない金科玉条と考え、「**マルクス主義における決定的な意義をもつもの、つまり、マルクス主義の革命的弁証法をまつたく理解しない**」のである。したがつてかれらは、いぜんソ連の偉大な変化を理解する能力をもたなかつたのと同様に、現

在もまた中国に生まれている生き生きとしたすべての事物を理解する能力をもたないのである。

中国人民がレーニンの生誕九十周年を記念するにあたつての第二の偉大な任務は、すなわち、ソ連を先頭とする社会主義諸国とともに、全世界の平和を愛するすべての勢力とともに、全世界の、帝国主義に反対し侵略に反対するすべての勢力とともに、世界の平和をまもり、帝国主義戦争に反対することである。

マルクス・レーニン主義は一貫して帝国主義戦争に反対である。第一次世界大戦の前夜と戦争の期間に、レーニンと、その他マルクス主義の立場を固くまもる労働者階級の左派の指導者がうち出した革命的スローガンは、すなわち、帝国主義戦争を国内戦争にかえ、これによつて帝国主義戦争をおわらせ、平和を実現させることであつた。十月革命の主要なスローガンのひとつは、すなわち平和であつた。十月革命が勝利してのち、レーニンはすぐさま平和の布告を出し、正義の平和を主張した。その後、レーニンは再三にわたつてソビエト国家と各国との平和共存の政策をうち出した。第二次世界大戦以前と以後のソ連は、世界の平和をまもり、集団安全保障を実行し、社会制度のことなる国家の平和共存を実行するために、周知のように、きわめて大きな努力をはらつた。

中華人民共和国は、成立のその日から、ソ連やその他の社会主義諸国とともに、すすんで世界の平和をまもるために奮闘している。1950年から1953年にいたるまで、中国人民は自己の志願軍を朝鮮前線におくつて、朝鮮人民とともに、アメリカの侵略を阻止するため、英雄的な闘争をおこない、朝鮮侵略米軍に休戦協定をうけいれることを余儀なくさせ、これによつて極東の平和をまもつた。1954年には、中国政府はジュネーブ会議にすすんで参加し、この会議でインドシナの平和回復についての協定を達成した。同じ年に、中国政府の指導者はあい前後してインド政府、ビルマ政府の指導者とともに、有名な平和共存の五原則を提唱し、この五原則はずつと、社会制度のことなるすべての国家にたいする中国の外交政策の土台となつている。1955年には、中国政府はインドネシアでひらかれたアジア、アフリカ諸国のバンドン会議にすすんで参加し、この会議は、五原則を基礎とするアジア、アフリカ諸国の相互関係における十原則を宣言した。1958年には、中国は朝鮮から人民志願軍をぜんぶ撤退させた。中国人民は一貫して世界の平和運動とアジアの平和運動にすすんで参加するとともに、アジアおよび太平洋地域の集団安全保障を実現し、アジアおよび太平洋地域の非核武装地帯をつくるよう再三提唱している。中国政府は平和な方法をとり、戦争の方法に訴えないで他国（アメリカをふくむ）との紛争を解決することを一貫して主張するとともに、いまにいたるもなお、この問題について、中国の領土台湾を侵略占領しているアメリカと話合いをすすめている。

社会主義諸国と全世界各国の共産党はすべて、世界の平和をかちとり、これをまもるために、ゆるぎない闘いを行つている。

1957年11月にモスクワでひらかれた社会主義諸国の共産党・労働者党会議によつて採択されたモスクワ宣言および六十四カ国の共産党・労働者党によつて採択された平和宣言は、いずれも全世界の労働者階級と平和を愛するすべての人びとに、行動をおこして平和をまもることを呼びかけ、この闘争は全世界における当面のもつとも重要な闘争であることを指摘している。モスクワの二つの宣言はいずれも、げんざい世界には平和をまもる強大な力が存在しており、これら強大な力の連合はすでに、戦争の勃発を阻止する実際の可能性をもつている、と指摘している。モスクワ会議ののち、平和の力はさらにいつそう強まつている。そ

れはなによりもまず、ソ連を先頭とする社会主義陣営がさらに強大になつたこと、ソ連が軍事の面ともつとも重要な科学・技術の面でさらにいちじるしくアメリカの前方をすすんでいること、ソ連閣僚会議議長フルシチョフ同志がアメリカとその他の資本主義国にたいして一連の平和訪問をおこなつたこと、ソ連政府が軍備縮小、核兵器の実験停止などの問題のうえで新たな大きな努力をすすめていること、ソ連、中国およびその他の社会主義国の平和への努力が日ましに人心をつかんでいること、などによるものである。同時にまた、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの民族独立運動ならびに資本主義諸国の人民の民主主義と社会主義をめざす闘いも、あらたな、大きな発展をとげている。帝国主義陣営内部の矛盾はひきつづき拡大しており、アメリカ本国の広はんな人民は、平和に反する政府の外交政策にたいしてぞくぞく不満と不安を表明しており、アメリカ帝国主義の境遇は日ましに困難となり、孤立化してきている。こうしたいろいろな状況から、新しい戦争のおもな画策者であるアメリカ帝国主義は東西首脳会談の提案をうけいれざるを得なくなり、場合によつては調子を変えて、かれらも「平和の願い」をもつものであると言つている。事実が証明しているように、世界の平和の力はいまや戦争の力をしのいでおり、これは毛沢東同志の言う「東風が西風を圧倒している」一つの現われである。

東風が西風を圧倒しているというのが、今日の世界の新しい情勢である。こうした新しい情勢は、レーニンが生きていたころとは根本的にちがうし、第二次世界大戦前夜の世界情勢とも根本的にちがう。帝国主義の新たな戦争計画に反対する闘争をすすめるにあたつて、こうした新しい情勢を評価することは、まつたく必要である。こうした新しい情勢によつて、全世界の平和を愛するすべての勢力、帝国主義に反対し、侵略に反対するすべての勢力は、これまでにない信念と勇気をえている。し

かし、力関係のこうした変化によつて、帝国主義の本性がすでに改められ、そのために現代の社会生活からいかなる戦争の可能性もすでに根本的にとり去られ、すでに人類はもはや永久平和の時代にはいつたと言うことは決してできない。

レーニンはつねに、帝国主義こそ現代の戦争の根源であると考えていた。レーニンはこう言つている。「**現代の戦争は、帝国主義によつて生みだされたものである。**」（「ツインメルバルド左派の決議草案」）戦争は「**帝国主義の本質から生まれてくるものである**」。（「ロシア共産党第八回大会における党綱領についての報告の結語」）レーニンの、根本的、原則的意義を有するこれらの断定は、帝国主義にたいする透徹した科学的分析から得られたものであり、そしてまた、すでに無数の歴史的事実によつて立証されたゆるがすことのできない真理である。二年あまりまえにひらかれた共産党と労働者党のモスクワ会議はまた、もつとも新しい事実によつてレーニンのこの原理を論証した。モスクワ会議の宣言にはつぎのように述べられている。

> **「帝国主義が存続するかぎり、侵略戦争の温床はつねにあるだろう。戦後の年代において、米英仏などの帝国主義者とかれらの手先はインドシナ、インドネシア、朝鮮、マラヤ、ケニア、グアテマラ、エジプト、アルジエリア、オーマン、イエーメンなどで戦争をおこなつたし、またおこなつている。同時に、帝国主義侵略勢力はにべもなく、軍縮を拒否し、原子兵器、水素兵器の使用と製造の禁止を拒否し、こうした兵器の実験の即時停止についての協定を結ぶことを拒否している。かれらはいわゆる『冷たい戦争』をつづけ、軍備競争をおこない、ますます多くの新しい軍事基地をはりめぐらし、平和を破壊する侵略政策をとつて、新しい戦争の危険をつくりだしている。核兵器禁止協定が成立しないうちに世界戦争が勃発す**

れば、それは空前の破壊力をもつ核兵器の戦争となることをまぬかれない。

「西ドイツでは、アメリカの後押しによつて軍国主義が復活しており、このためヨーロッパの中心に重大な戦争の危険の策源地をつくりだしている。……

「同時に、帝国主義者は悪名高い『アイゼンハワー＝ダレス・ドクトリン』を中近東の自由を愛する諸国民におしつけようとしており、このためこの地域の平和に脅威をつくりだしている。……

「東南アジア条約機構というこの侵略ブロックは、東南アジアにおける戦争の危険をつくりだしている。」

六十四カ国の共産党・労働者党の平和宣言にはつぎのように述べられている。

「平和の勢力は巨大である。こうした勢力は戦争をふせぎとめ、平和を維持することができる。しかし、われわれ共産主義者は、世界のすべての人びとにむかつて、おそるべき、殺りく戦争の危険はなくなつてはいないと警告することを自分の責務であると考えるものである。

「平和の事業にたいする脅威、諸国民の安全にたいする脅威はいつたいどこからくるのだろうか？　戦争に熱中し、戦争を夢みているのは、二回にわたる世界大戦でボロ儲けをし、いまの軍備競争でもボロ儲けをしている独占資本グループである。軍備競争は独占資本家に巨額の利潤をもたらし、しかも、ますます重い負担を勤労者の肩におしつけ、多くの国々の経済状態をひじように悪化させている。一部の資本主義国の支配グループは、独占資本、とりわけアメリカの独占資本におされて、軍縮、核兵器禁止、およびその他新戦争の防止に関する諸提案を拒否している。……

「平和を大切なものとするすべての人びとが努力を結集し、戦争挑発者の陰謀にたいする警戒心をたかめ、いまだに脅かされている平和をまもる闘いを強化することが自分たちの神聖な義務であることを徹底的に自覚するとき、平和ははじめて維持することができる。」

このことからも分かるように、帝国主義は現代戦争の根源であるというレーニン主義の原理は、けつして「時代おくれ」ではないし、また絶対に「時代おくれ」にはなりえないのである。帝国主義がまだ存在している状況のもとでは、戦争の危険にたいする警戒心を絶対にゆるめてはならない。中国人民は、この基本的立場に立つて、世界の平和を守り、帝国主義戦争に反対する闘争をすすめてきているのである。われわれは、国際情勢が緩和するごとにこれを歓迎し、いかなる国（アメリカをふくむ）の誠実な平和への努力をも歓迎すると同時に、ひきつづき新たな戦争を画策する帝国主義の凶悪な活動を、時をうつさず全国と全世界の人民大衆にうつたえて、かれらの注意を喚起し、かつまた、全世界のすべての平和勢力が一致団結しさえすれば、かならず戦争勢力を圧倒することができ、われわれの闘争の前途は光明にみちていることを指摘している。われわれはこれまでもそうしてきたし、今後もひきつづきそうするであろう。

アメリカ帝国主義は、ソ連を先頭とする社会主義陣営がおこなう平和へのあらゆる努力をひじようににくんでいる。アメリカ帝国主義は、中華人民共和国にたいするその敵視政策をあけすけに宣言し、世界の平和を守り帝国主義戦争に反対する中国人民の正義の立場を、なんら憚るところなく攻撃している。中国人民は、アイゼンハワーを頭とするアメリカ政府が、昨年の9月にフルシチョフ同志とアイゼンハワーがキャンプ・デービッド会談をおこなつてからも、ひきつづき軍備拡張と戦争準

備に力こぶを入れ、侵略を拡大している事実にたいして、時をうつさずこれを暴露した。アメリカ帝国主義の代言人は、中国人民があたかも国際情勢の緩和に不熱心であるかのように中傷している。この途方もない大嘘は、あまりにも恥しらずなものである。アメリカ政府とアイゼンハワー自身が実際には軍備拡張と戦争準備をおしすすめ、侵略を拡大している以上は、国際情勢の緩和の要求にそむいて逆の方向に走るものである。これをごまかし、ひいてはこれを粉飾し美化し称讃することは、国際情勢にとつて何の役に立つだろうか？　それは逆に、情勢の緊張をつくり出すものを、いつそう思うままにふるまえるようにするだけである。

事実は雄弁に勝る。9月のキャンプ・デービッド会談いらいのアメリカ政府とアイゼンハワーの平和に反する言動についてのもつとも簡単な摘録を見てみよう。

1959年10月16日、アメリカのバージング国務次官補は演説をおこない、自分は、アメリカは平和共存をうけいれることができないと考えている、なぜならこれは、社会主義陣営の現状を認めるにひとしいからである、と述べた。

10月21日、アメリカは国連総会をあやつつて、いわゆる「チベット問題」についての不法な決議を採択し、中国の内政に干渉し、中国政府がチベット地方の農奴主の反動グループによる叛乱を平定したことについて誹謗をくわえた。

10月22日、アメリカ国務省は、ハンガリーの反革命叛乱事件の三周年について声明を発表し、ハンガリー政府とソ連政府を中傷するとともに、この叛乱をおこした反革命分子を「賞揚」した。

11月3日、パナマ運河地帯の人民がデモをおこない、運河地帯にたいするパナマの主権の回復を要求したために、アメリカ占領軍はこれを弾圧し、

120余名のパナマ人に傷を負わせた。

11月13日、アメリカのニクソン副大統領は、「西方諸国はソ連人の言う平和共存をうけいれることはできない」と述べた。

11月22日、アメリカのハーター国務長官は、アメリカの「パレード」誌上に文章を発表し、ソ連は「侵略的意図」をもち「拡張主義の運動」をすすめている、と中傷した。

11月27日、アメリカ国務省は声明を発表し、アルバニアは「ソ連の支配をうけている」と誹謗した。

12月1日、アメリカのマケルロイ国防長官は、「1963年になれば、アメリカはいつそう多くの方法で核弾頭を発射することによつて、ソ連に対抗することができるであろう」と述べた。

12月4日から22日まで、アイゼンハワーは冷戦拡大の目的をもつて、ヨーロッパ、アジア、アフリカの十一カ国を訪問した。アイゼンハワーは訪問中に西方軍事ブロックの強化を極力鼓吹し、「北大西洋同盟はやはりわが外交政策の基本である」と言い、アメリカは中央条約機構を放棄することはできないと述べるとともに、海外におけるアメリカのミサイル基地網を拡張するために積極的な活動をおこなつた。

12月9日、アメリカは国連総会をあやつつて、朝鮮問題についての提案を採択し、朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議が10月27日に出した呼びかけを無視して、南朝鮮からの米軍の撤退と朝鮮の平和統一の実現をこばむとともに、朝鮮において、交戦国の一方としての国連の「監督」下にいわゆる「自由選挙」をおこなうことをあくまで主張した。

同日、アメリカは国連総会をあやつつて、ハンガリーの内政に干渉するいわゆる「ハンガリー問題」の提案を採択した。

12月15日、ハーターは北大西洋条約機構の理事会に、「十カ年計画」を提出し、同ブロックが大規模な戦争を遂行する「威嚇力」と、局地的な戦争を遂行する「十分な弾力性」をもつようにと要求した。

12月24日、アメリカは、ラオスの少数の極端な親米分子をそそのかして軍事クーデターをおこない、ラオスの内戦をさらに拡大した。

12月29日、アイゼンハワーは、アメリカは1960年1月1日から「核兵器の実験再開の自由を有する」と声明した。

1960年1月7日と18日に、アイゼンハワーは一般教書と予算教書を提出し、アメリカが「われわれのいかなる些細な力をもささげ」て「威嚇力」を提供することを要求しており、1961会計年度の軍事支出を、総予算の57・1パーセントをしめる455億余ドルとしている。アイゼンハワーは、一般教書のなかで、社会主義国を「警察国家」であると中傷し、ソ連は「帝国主義的共産主義」であると中傷し、社会主義陣営は「陰惨な衛星国の体制」であると中傷した。

1月15日、ニクソンは「いかなる状況下にあつても、アメリカとその同盟国はその兵力を削減することはできない。」と述べた。

1月19日、日米「相互協力及び安全保障条約」がワシントンで署名された。この侵略的な軍事同盟条約は、直接中国、ソ連、朝鮮民主主義人民共和国を目標とするものであり、かつまた、アジア諸国の平和と安全をおびやかしている。

2月3日、アイゼンハワーは記者会見の席上、「わたしはキャンプ・デービッド精神などというものは知らない。」と公言した。かれはまた、アメリカは核兵器の秘密資料をその同盟国に与える、と言明した。

2月5日、アメリカ国務省は声明を発表し、ワルシャワ条約加盟国会議の、ワルシャワ条約機構と北大西洋条約ブロックの相互不可侵条約締結についての提案を、かさねて拒否した。

2月15日、ハーターは声明を発表し、こともあろうに、ソ連の三つの加盟共和国――リトワニア、ラトビア、エストニアが「ふたたび国家の独立を享受する」ことを要求した。

2月16日、アイゼンハワーは「相互安全保障」についての教書のなかでこう述べている。「ソ連が兵力を削減していること――もしこれが事実としても――によつてわれわれの集団防衛を維持する必要性があることには変りはない。」「われわれの共同の威嚇力の立場を放棄したり弱めたりすることは、きわめておろかなことである。」かれはまた、アメリカは「われわれの共同防衛を維持するために、孜々として、地みちに、辛抱づよくあくまで努力しなければならない」と言つた。かれは、新しい会計年度における対外軍事援助支出を前年度より7億ドル上回る20億ドルとすることを公表した。

2月17日、アイゼンハワーは、中東の情勢に関する報告のなかで、アメリカは、米議会が1957年に採択した、中東問題についての決議（すなわち「アイゼンハワー・ドクトリン」）をひきつづき実施すると述べた。

2月19日、パーソンズ米国務次官補は演説をおこない、アメリカはひきつづき中国の領土台湾を侵略占領し、新中国の「崩壊」に「のぞみをかけている」とのべ、また、アメリカは「（中国の）こうした力の増大の相殺をはかる政策」を遂行し、「こうした力に対処する措置を堅持する」と述べた。

2月22日から3月3日まで、アイゼンハワーは南アメリカを訪問し、「パン・アメリカ体制」の強化を鼓吹し、米州諸国機構がキューバに干渉するため昨年8月、サンチアゴで挙行した外相会議をほめたたえるとともに、米州をアメリカ人の米州とするいわゆるモンロー主義をあくまで堅持することを表明した。

2月26日、アメリカは朝鮮休戦協定にそむいて、たえずミサイル兵器を南朝鮮にもちこんだのち、南朝鮮の烏山でミサイル「マタドール」を公然と発射した。

2月29日、アメリカはキューバ政府の照会に回答をおくり、キューバ政府の提出した米・キューバ会談再開に必要な条件、すなわち、アメリカはキューバ人民に損害を与える可能性のある措置をとらないという条件を拒否し

た。しかも、アメリカは必要とみとめる「いかなる措置」をもいつでも自由にとることができるといつて威嚇した。この前にも後にも、アメリカの飛行機は連続的にキューバを爆撃している。キューバのカストロ首相が3月14日に語つたところによれば、アメリカ機のキューバにたいする空襲はすでに40回以上にたつしている。

3月9日、アフリカ担当のアメリカ国務次官補サタースウエイトは、アメリカは北アフリカに「政治上、軍事上の特殊な利益をもつている」と述べた。「アメリカはアフリカにおけるいちぶの重要基地を使用する権利を保持すること、アメリカとその同盟国はひきつづきアフリカで広はんな重要物資、主として鉱産物を獲得すること、これまたひじように重要である。」とも言つた。かれはまた、「（アフリカの）民族主義の高まりを、過去から未来へ整然と移つてゆく方法と協調させる必要がある。」とも述べている。

3月16日、アメリカと蔣介石一味は、台湾海峡で大規模な軍事演習をおこない、5万人の米軍がこれに参加した。

同じ日、すなわちアイゼンハワーとアデナウアーが共同コミュニケを発表した翌日、アイゼンハワーは「われわれは、双方のどちらの側も政策を変えてはいないことを一致して認めた。」、「われわれは、ベルリンにおけるわれわれの権利を放棄しない。」と言つた。

3月21日、アメリカの軍艦がまた中国の領海を侵犯した。中国政府はアメリカにたいして第93回目の厳重な警告を発した。1959年10月から現在までに、アメリカは中国の領海、領空を合計21回侵犯している。

3月30日、アイゼンハワーは、現在アメリカは核実験の一時的停止についての協定をむすぶことに同意するとしても、アメリカの次期大統領はその拘束をうけなくてもよい、と言明した。かれは、「いかなる後継者もこの問題について自己の判断を下す権利をもつている」と述べた。ハーターは4月8日、さらにすすんで、法律上の見地から見て、アイゼンハワーが「アメリカにわりあい長い期間にわたる義務を負わせる能力」をもつのは、「やはりかれ自身の任期内に限られている」と言つた。

4月4日、ハーターは演説をおこない、全面的軍縮についてのソ連の提案を拒絶し、ソ連閣僚会議議長フルシチョフの、ドイツ問題についての談話を攻撃して、「事態を複雑化させる」ものであると言つた。ハーターはまたこう述べている。「首脳会議で注目をひくような成果をおさめることを期待するものがあるならば、その人は失望するであろう」。かれは、西ドイツの急速な再武装に「満足の意」を表明するとともに、「北大西洋条約機構の陸海空軍部隊はやはり一段と強化しなければならない」と言つた。

4月6日、アイゼンハワーは、大陸間弾道弾とポラリスを発射する原子力潜水艇の発展をはやめる計画を正式に承認した。報道によれば、アメリカ政府は、もと三年内に製造することになつていた大陸間弾道弾の数を270から312にふやし、原子力潜水艇を7隻から40隻にふやそうとしている。

4月9日、アメリカ太平洋艦隊の潜水艦・艇隊司令官ベンソンは、アメリカは将来、ポラリスを発射する原子力潜水艇30隻をもつてソ連と各社会主義国を包囲する、とわめきたてた。

4月14日、アメリカ代表イートンは、十カ国軍縮委員会の席上、核兵器をもつ国が、はじめに核兵器を使わない義務を負うことについての社会主義国の提案に反対するとともに、アメリカは全面的、徹底的軍縮についてのソ連の提案をうけいれることはできない、とかさねて言明した。

4月20日、ジョン米国務次官は演説を発表して、ソ連の対外政策を攻撃し、ソ連は「拡張の野心」をもつていると誹謗し、「『共存』という言葉は実際にはおそるべき、またにくむべきものであり」「ゴミ箱にほうりこむ」べきであると言い、アメリカの軍事力と侵略的軍事ブロックの体制を「維持、強化」しなければならないとわめきたてている。

同日、アメリカに支持されたベネズエラの叛乱分子は武装叛乱をおこし、ベネズエラ政府を転覆させようとくわだてた。

ここに列挙したのは、もちろんきわめて不完全なものであり、しかも

アメリカ政府とアメリカの新聞・雑誌に公表された資料だけに限られている。しかし、これらすべては事実でないかどうか尋ねてみたいものである。これらすべては、つまるところアメリカの当面の政策のおもな事実ではないだろうか？　これは中国の共産主義者のでつち上げだとでも言えるのだろうか？　これはアメリカの政策中の第二義的な、挙げるに値しない旧時代の遺物にすぎないとでも言えるのだろうか？　もちろん事実はそうではない。事実は、キャンプ・デービッド会談のあとで、東西首脳会談の前夜であるにもかかわらず、われわれには、アメリカ帝国主義の戦争政策のいかなる実質的な変化も見うけられないし、アメリカ政府とアイゼンハワー本人のとる政策にいかなる実質的な変化をも見てとることはできない、ということである。アメリカ帝国主義はいまやじぶんの侵略的軍事力の拡大につとめているばかりでなく、さらにまた矢も盾もたまらぬようにして西ドイツと日本の軍国主義勢力を育てあげ、かれらを新戦争の策源地にしている。これらすべての事実は、全人類の運命に影響をおよぼしていることを知らなければならない。西ドイツの軍国主義、日本の軍国主義、その他アメリカの育成する軍国主義に反対することは、まつたく必要である。しかし、これらすべてにたいして決定的な作用をもつているのは、なによりもまずアメリカ帝国主義の戦争政策であつて、この点をはなれれば、事実の核心、事実の本質をはなれることになる。したがつて、全世界の平和を愛する人民がもしも力を結集し、アメリカ当局のこうした戦争政策にたいして、ひきつづきだんこたる暴露ときびしい闘争をおこなわないならば、必然的に重大な災禍をまねくであろう！

ソ連やその他の社会主義国の人民とともに、平和のための闘いの最前線に立つている中国人民にとつて、これらすべての事実にたいして沈黙をまもる権利などがあるだろうか？　アメリカ人だけにこれらすべての

ことをやらせ、これらすべてのことを言わせ、これらすべてのことを知らせておいて、中国人やほかの国の人には事実の真相を知らせないという権利などがあるだろうか？　中国と世界の人民大衆に事の真相を説明すれば平和にとつて不利であり、情勢の緊張を激化させることになり、真相をおしかくしてこそ、はじめて平和にとつて有利であり、情勢緩和にとつて有利であるとでも言うのだろうか？　アメリカ帝国主義のロジックにしたがえば、平和とはこうして「維持」されるものだとでも言うのだろうか？　あるいはまた、これこそがアイゼンハワーのたぐいの言う「自由のなかの平和」なのだろうか？

新たな戦争を積極的に画策するアメリカ帝国主義者は、われわれが事実の真相を覆いかくすことを確かに望んでおり、われわれが、マルクス・レーニン主義の観点を放棄することを望んでおり、われわれが、帝国主義の本性は変えられるものであり、はなはだしきに至つてはすでに変えられていると信じこむことを望んでおり、われわれが、ブルジョア平和主義者とまつたく同じように、世界の平和をまもる闘争のなかで、帝国主義に反対し、帝国主義戦争に反対し、帝国主義の侵略に反対するもつとも広はんな人民大衆を動員せず、これに頼ろうとしないことを望んでおり、帝国主義侵略勢力が余儀なくとつている平和のみせかけを、われわれが極力誇張して、人民大衆の警戒心を失わせるよう望んでおり、あるいはまたわれわれが、帝国主義侵略勢力の戦争の威力を極力誇張して人民大衆を恐れおののかせるようにすることを望んでいる。要するに、新たな戦争の画策者は、第一次世界大戦や第二次世界大戦のときと同じように、突然戦争を各国人民に押しつけることができるようにするために、われわれがかれらと同じように平和を求めるようなそぶりをし、みせかけだけの平和を求めるようにと望んでいるのである。

だが、新たな戦争の画策者は聞くがよい、おまえたちの希望は永久に

実現できないものだ！　われわれは、真に平和を求め、真の平和を求めているからには永久におまえたちのワナにかかるようなことはない。われわれはかならずアメリカ帝国主義とその他の帝国主義の、平和をおびやかすすべての陰謀詭計をひきつづき暴露し、最大の努力をはらつて、帝国主義に反対し、帝国主義戦争に反対し、帝国主義の侵略に反対する広はんな大衆を動員して、新たな戦争の画策者にたいするねばりづよい闘争をおこなうとともに、かれらが闘争のなかで十分な警戒心を保持し、また十分な確信をいだいて、新たな戦争を阻止するために最後まで闘いぬくようにさせなければならない。こうしてこそはじめて、真に平和を求めるものであり、真の平和をかちとることができるのであつて、そうでなければ、平和をもとめるようなそぶりにすぎないか、または、みせかけだけの平和しか得られないことになるのである。

前に述べたように、帝国主義の本性は変えることのできないものであるが、われわれは、一致団結した、ますますはげしい闘争をおこないさえすれば、平和をまもる強大な力はかならずいく重もの障害をもうけて、帝国主義がその本性の命ずるがままに振舞えないようにすることができると確信している。そしてまた、万一の場合にはモスクワ宣言が述べているように、「**もしも帝国主義の戦争狂どもが何もかも無視して戦争をひきおこすならば、帝国主義は必ず亡びてしまうにきまつている。なぜなら、人民はけつして、かれらにかくも悲惨な苦痛と犠牲をもたらす制度にこれ以上我慢できなくなるからである。**」モスクワ宣言がこの点を指摘したのは絶対に必要であり、これは平和の前途を弱めるためではなくて、反対にこれを強めるためである。なぜなら、こうしてこそはじめて、諸国民は精神的に武装解除することなく戦争狂どもの恫喝と欺瞞に屈服することなく、さらにまた、不幸にして万一戦争が勃発したさいにも、驚きあわてないですむからである。

社会制度のことなる国々の平和共存のためには、伸縮性と辛抱づよさが必要であり、ある程度の諒解と妥協に到達することが必要である。中国人民は、内外の敵にたいする闘争のなかで、人民の基本的利益を損わない妥協をこれまでかつて拒んだことはないし、こんごもまたこうした妥協を拒むことはない。中国人民は、フルシチョフ同志とソ連政府の、東西首脳会談の問題についての努力を熱烈に支持するとともに、アメリカ政府がこれまでとつてきた頑固な態度を改め、これによつてこの会談が軍縮問題、核兵器の実験停止の問題、西ベルリンとドイツ問題および国際情勢を緩和させる問題のうえで、各国民の期待する協議を達成することができるように望んでいる。

しかし、世界の平和をかちとることは、長期にわたる闘争である。帝国主義は平和に有利な協定をたやすく受けいれるものではない。しかも、無数の歴史的事実が証明しているように、帝国主義が同意した協定であつても、帝国主義はいつでもこれをくつがえすものである。したがつて、平和に有利な協定を達成するためであろうと、あるいはまたこれらの協定を維持するためであろうと、いずれも闘争を経なければならない。レーニンは次のように言つているが、全くそのとおりである。「**いまや平和をめざす闘争が展開されている。この闘争は困難なものである。平和は手軽に達成できると考えるならば、平和のことに一言ふれただけで、ブルジョアジーは平和を盆に盛つて、われわれのところにはこんで来るだろう、と考えるならば、それは、あまりにも天真爛漫な人である。こういう見方をボルシエビキになすりつけるものは、ひとを欺いているのである。資本家たちが死に物狂いのつかみ合いをするのは獲物を分配するがためである。戦争をぶつつぶすことがつまり資本に勝つことだということは、はつきりしている。そして、ソビエト権力はこう**

いう意味から闘争を開始したのである。」（「第一回全ロシア海軍大会での演説」）まさしく、現代の戦争は帝国主義の本質から生み出されるものであり、帝国主義の本性は変えることのできないものであるからこそ、世界の平和をかちとり、これをまもる闘争は、持久的な、帝国主義反対の闘争とならざるを得ないのである。したがつて、帝国主義についてのレーニンの理論をくりかえし宣伝し、帝国主義の本質とそのすべての欺瞞手段を暴露することが、当面の平和事業におけるさし迫つた任務となつているのである。

帝国主義が現代の戦争の根源である以上、世界の平和をかちとる闘争をすすめるにあたつては、帝国主義に反対し、帝国主義戦争に反対し、帝国主義の侵略に反対するすべての勢力と、かならず連合しなければならない。モスクワ宣言はこう述べている。「**平和の事業をまもつているのは、当代のこれらの強大な力、すなわち、ソ同盟を先頭とする社会主義諸国の無敵の陣営、反帝国主義の立場をとり、かつ社会主義諸国とともに広大な平和地域を構成しているアジア、アフリカ平和愛好諸国、国際プロレタリアート、とくにその前衛である共産党、植民地・半植民地人民の解放運動、世界諸国民の平和をめざす大衆運動である。あくまで新戦争の画策に反抗しているものにはさらに、中立を宣言したヨーロッパの諸国民、ラテン・アメリカの諸国民、帝国主義諸国の人民大衆がある。これらの強大な勢力の同盟は戦争の勃発を阻止することができる。**」

帝国主義者、とりわけアメリカ帝国主義者は、あらゆる手段を弄してこの連合闘争を破壊しようと努めている。かれらは、世界の平和をめざす闘争と、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの民族独立運動および自由、民主主義、社会主義をめざす諸国民の闘争とを対立させようと夢みている。かれらは、平和を求める以上、圧迫されている民族は侵略に反抗すべきではなく、搾取されている人民は革命に起ちあがるべきで

はないと言うのである。かれらは、はなはだしきに至つては、社会主義国は他国の人民が革命をおこなうのを許さないようにする義務をもつかのようにさえ考えている。これはまつたくのでたらめである。周知のように、マルクス・レーニン主義者は、圧迫されている民族であろうとあるいは搾取されている人民であろうと、いずれにたいしても革命は輸出できないものであると一貫して考えている。同じように、革命はいかなる者といえども禁止することはできないし、またそうする権利もないのである。現代の革命は基本的には、おくれた民族と自国の勤労大衆にたいする帝国主義の侵略、圧迫、略奪に起因するものである。したがつて、帝国主義者がこうした侵略、圧迫、略奪を放棄しないかぎり、帝国主義が帝国主義であるかぎり、各国の被圧迫人民もまた、かれらの民族革命と社会革命を放棄することはありえないのである。

帝国主義国はこんにちなお、社会主義国の内政をもふくめて、他国の内政への干渉をやめてはいないのに、それでいて、社会主義国が他国の内政に干渉しているとデマをとばしている。もちろん、社会主義国は、帝国主義国をふくめて、他のいかなる国の内政にも絶対に干渉しない。ところが、帝国主義国はいまかえつて、社会主義国に強制し、またはこれを誘いこんで、かれらが他国の内政に干渉するのを手助けさせようと考えているが、これはでたらめもはなはだしいものではないか？

帝国主義がひきつづき存在し、ひきつづき暴力を用いて侵略政策、圧迫政策、略奪政策を遂行している状況下にあつては、社会主義国は、圧迫されている民族、搾取されている人民の反抗闘争にたいして、つねに同情と支持の態度をとるものである。なぜなら、かれらの闘争は人民の願望を代表するものであり、帝国主義勢力を弱め、世界の平和に役立つものだからである。こうした闘争の発展と、これらの闘争にたいする支持が平和の事業に不利であると考えるのは、でたらめもはなはだしいも

のではないか？

社会主義国と世界各国の、帝国主義に反対し平和を愛する人民はすべて、戦争をふせぐために努力をかたむけている。社会主義国の力がますます強大になり、帝国主義に反対し平和を愛する諸国の勢力がますます強大になれば、戦争をふせぎとめる可能性はますます増大するのである。したがつて、社会主義諸国の力を強化し、民族解放運動の力を強化し、資本主義国におけるプロレタリアートの解放運動の力を強化し、世界各国の平和を愛する力を強化すれば、帝国主義戦争をいつそう効果的にふせぎとめ、世界の平和をまもることができるのである。

レーニンの生誕九十周年を記念するにあたつて、中国人民の第三の偉大な任務は、各国人民との友好団結、とりわけソ連を先頭とする社会主義諸国との友好団結をかため、つよめることである。

マルクス・レーニン主義は、真のプロレタリア国際主義であり、そもそもの始めから国際的な現象である。中国革命の勝利、中華人民共和国の社会主義建設の発展は、プロレタリア国際主義の支持ときりはなすことができないものである。中国人民は、こうした支持にたいする感謝の念を永遠に忘れることはできないし、また、自己の努力をもつて、国際プロレタリアートと被圧迫民族を支持する義務を永遠に忘れることはできないのである。そうだからこそ、毛沢東同志は中華人民共和国成立の前夜、「**われわれの経験を総括して、一点にまとめれば、それは労働者階級（共産党を通じて）の指導する、労農同盟を基礎とした人民民主主義独裁だということである。この独裁は、国際革命勢力と一致団結しなければならない。これがわれわれの公式であり、これがわれわれの主要な経験であり、これがわれわれの主要な綱領である。**」ととくに指摘し

たのである。そしてまた、その故にこそ、周知のように北京の天安門の両側にある大きなスローガンが、ひとつは「中華人民共和国万歳」、もうひとつは「世界人民大団結万歳」となつているのである。

中国人民は、どんな場合でもつねに、各国人民との友好団結を堅持する必要がある。中国人民が欣快にたえないのは、われわれと偉大なソ連を先頭とする社会主義陣営諸国との兄弟のような団結が日ましに発展しつつあり、われわれとアジア、アフリカ、ラテン・アメリカにおける、平和を愛し帝国主義の侵略に反対する各国人民との友誼が日ましに拡大しつつあり、われわれとその他の資本主義国の人民との友好的なつながりも日ましに増進しつつあることである。中国人民は、この基礎のうえにたつて、各国人民の共通の利益をめざしてともに奮闘するため、われわれとすべての国の人民との友好団結をうまずたゆまず強化してゆくであろう。

帝国主義、とりわけアメリカ帝国主義は、世界人民の団結を破壊するために、いちぶの国々で躍起になつて反中国運動を扇動している。しかし、こうした運動は、各国人民の支持をえられないし、また永遠にえられるものではない。なぜなら、そのような運動は全く道理に合わないからである。中国人民は自分の家で勤勉に平和な新しい生活をきずきあげ、自分の隣人とはともに仲よく生活するよう努力しており、どこかの外国や海外に行つて軍事基地やミサイル基地などつくつてもいないのに、どうして反対するのだろうか。われわれの知つているように、レーニンのうち建てたソ連は元来平和な国であるが、それでいて、長期にわたつて、一部の大小の国々（その中にはソ連の援助した国、たとえば国民党時代の中国のごときもふくまれている）のなかのある種の国内的な目的のためにソ連に反対する人びとの中傷と攻撃をうけてきた。しかし、これは、ソ連を傷つけることはできなかつたし、また各国人民とソ

連人民との友好関係の発展を妨げることもできず、かえつてそれら反ソ分子の、平和に反対し人民に反対する真の面目を暴露したにすぎなかつた。帝国主義およびいちぶの国の反動派が扇動している反中国運動も同じ結末におわるだけにすぎない。

帝国主義者とその共犯者である現代修正主義者、各国のひとにぎりの反動派は、いまやとくに狂気のように各種の卑劣な方法にうつたえて、中国とその他の社会主義国とのうち破ることのできない兄弟のような団結に対して挑発しようとたくらんでいる。これらの挑発者はこの上なく悪らつであり、しかも愚劣きわまるものである。かれらは、社会主義諸国の団結は偉大なゆるぎないマルクス・レーニン主義の旗じるしの下に形成され、発展してきたものであることを永久に理解することはできないのである。モスクワ宣言はこう述べている。「**社会主義諸国が統一的な大家庭に団結しているのは、これら諸国が共通の社会主義の道をすすんでいるからであり、その社会・経済制度と国家権力が共通の階級的実質をもつているからであり、相互に支持し、援助することを必要としているからであり、帝国主義に反対し、社会主義、共産主義の勝利をめざす闘争のなかで共通の利益と目的をもつているからであり、共通のマルクス・レーニン主義の思想をもつているからである。**」と。

帝国主義者、現代修正主義者、各国のひとにぎりの反動派がこうした狂気じみた挑発をおこなつているのは、その地位の強固さを示すものではなくて、かれらが滅亡に近づいていることを示すものである。レーニン主義の、半世紀の間における急速な勝利、とりわけ第二次世界大戦いらい十五年間における急速な勝利は、かれらを極度の不安におとしいれている。このような、きわめて広はんな大衆の支持をうけた、天地をゆるがすような勝利を前にして、世界制霸を夢みる帝国主義は、レーニンが「モスクワの党員採用週間の総括とわれらの任務」という一文のなか

で述べているように、「泥で造つた巨人」にすぎないのである。かれらが、レーニンの旗の下における、社会主義運動、民族独立運動の猛烈な発展とゆるぎない団結を目の仇にするのは当然なことであるが、しかし、かれらが悪罵をなげかければなげかけるほど、ますますレーニン主義の必然的勝利を証明するだけである。レーニンは、革命の敵によつて攻撃された場合には喜んでいた。なぜなら、そのことは、かれが正しかつたことを証明しているからである。かれは自分の著書の中に、ロシアの大詩人ネクラソフの詩句を一再ならず引用している。

人びとはかれにそしりの言葉をなげつける　だが
かれはよしとする声をきく
ほめたたえる甘い言葉ではなく
いきりたつ激しい叫びのなかに

レーニン主義の正しさは、敵の悪罵によつてではなくて、敵の賞讃によつて証明されるとでもいうのだろうか？

中国人民は、その社会主義建設の努力のなかで、平和をまもり戦争に反対する努力のなかで、国際革命勢力の団結を強める努力のなかで、すべてこれまで革命の敵の狂気じみた攻撃にあつてきた。しかし、これらはすべて、中国人民の選んだ道が正しいことを証明するばかりである。中国人民は永遠に、偉大なレーニンの道に沿つて、中国の社会主義事業の勝利をめざし、世界平和事業の勝利と国際社会主義事業の勝利をめざして勇敢に前進するであろう！

マルクス・レーニン主義は、ソ連、中国およびその他の社会主義諸国においてのみならず、さらに全世界のすべての他の国々においても、かならずやより偉大な勝利をかちとるであろうことは、なんら疑いのないところである。もちろん、歴史の発展は不均衡であるが、しかし、人類の歴史発展のながい途上におけるなにがしかの曲折や停滞はつまるとこ

ろ、局部的、一時的な現象にすぎない。

われわれは本文の始めのところで、「カール・マルクスの学説の歴史的運命」というレーニンの1913年の論文に言及している。レーニンはその論文のなかで、当時ヨーロッパにおける革命の発展が比較的停滞していたところから、アジアは世界的嵐の新しい源であると、とくに指摘している。当時レーニンは、そうした停滞は一時的、表面的な現象にすぎないと断定し、まさに来らんとする歴史時代は、マルクス主義というこのプロレタリアートの学説にさらに大きな勝利をかちとらせるにちがいないと断定している。レーニンはこう言つている。

「日和見主義者たちが『社会平和』を必死になつて賞讃し、『民主制度』のもとでは嵐を避けられると必死になつて鼓吹していたそのときに、きわめて大きな世界的嵐の新しい源がアジアに出現した。……

「アジアのあとからヨーロッパも——ただし、アジアふうにではなく——動きはじめた。……狂気のような軍備競争と帝国主義政策によつて、現代ヨーロッパの『社会平和』は、まるで火薬樽のようだ。あらゆるブルジョア政党の解体とプロレタリアートの成熟の過程がたゆみなくすすんでいる。」

レーニンのこの科学的な見通しは、1917年のロシアで実証され、つづいてまた、第二次世界大戦がおわつてのち、いつそう広範囲にわたつて実証された。げんざい世界的嵐の新しい源は、すでにアジアだけにとどまらず、アフリカ、ラテン・アメリカにもあらわれている。天地のどこをさがしても、いまはもう帝国主義の安全な後方は一カ所もない。西ヨーロッパと北アメリカのいちぶの国には、まだある程度の「社会平和」がある。しかし、これらの国々の狂気じみた軍備競争と帝国主義政策によつて、ソ連を先頭とする社会主義陣営の強大さと民族独立運動、人民革命運動の高まりによつて、平和運動が人心をつかんでいることによつ

て、これら西方諸国内部の「社会平和」は、実際にはますますレーニンのいう火薬樽そつくりになつている。中国人民と世界各国人民は一致した努力によつて、帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義であるレーニン主義の理論が、やがておとずれる歴史時代において、いつそう大きな勝利をおさめるようにしようではないか！

（1960年4月22日の「人民日報」より）

レーニンの革命の旗の下に団結せよ

1960年4月22日、中国共産党中央が北京で行つたレーニン生誕九十周年記念大会における報告

陸 定 一

同志ならびに友人のみなさん

今日、4月22日は、偉大なレーニンの生誕九十周年であります。

レーニンはマルクス、エンゲルスのあとにつぐ、全世界のプロレタリアート、勤労大衆、被圧迫民族の偉大な革命の指導者であり、教師であります。レーニンは、帝国主義時代という歴史的な条件のもとで、プロレタリア社会主義革命の烈火の中で、マルクスとエンゲルスの革命的な学説をだんことしてまもりぬき、これを発展させて来ました。レーニン主義は、帝国主義とプロレタリア革命の時代におけるマルクス主義であります。レーニンの名は、全世界の勤労大衆の心の中における、プロレタリア革命の勝利の象徴であり、社会主義と共産主義の勝利の象徴であります。

九十年前、レーニンが生まれた時には、人類はまだ資本主義の暗黒支配の下におかれていました。レーニンとロシアのボルシエビキ党は、ロシアのプロレタリアートと勤労大衆をみちびいて、世界帝国主義の鉄鎖を断ち切り、革命的な暴力によつてブルジョアジーの暴力的支配をうちたおし、偉大な十月社会主義革命の勝利をおさめ、最初のプロレタリアート独裁の国家をうちたて、人類の歴史に新しい紀元をひらきました。十月革命は勤労大衆と進歩的な人びとの幾百幾千年らいの夢を実現し、世界の六分の一の土地に、開闢いらいはじめて、人間が人間を搾取することのない社会をうちたてました。帝国主義はこの新しく生まれたソビエト国家を扼殺しようと夢みました。十四の資本主義国が、当時のロシア国内の反革命勢力と結託し、武力干渉をおこなつたのであります。レーニンとボルシエビキ党員は、英雄的なソ連の労働者階級と勤労大衆をみちびいて、帝国主義の武力干渉を粉砕し、国内の反革命の叛乱を一掃しました。レーニンは社会主義建設の道を指し示し、社会主義工業化と農業の集団化の道を指し示しました。レーニンが逝去した後、スターリンをはじめとするソ連共産党中央とソ連政府は、ソ連人民をみちびいて、レーニンの指示を実現し、わずかな歴史的期間内に、ソ連を、経済的、技術的にたちおくれた国から強大な社会主義の国へと急速にきずきあげました。第二次世界大戦中、ソ連はファシストの侵略をうちやぶる主力となり、東欧諸国の人民が自己の解放をかちとるのを援助し、アジア諸国人民を援助して日本帝国主義をうちやぶり、プロレタリア革命の事業と民族解放の事業を大いに促進し、世界の平和にきわめて偉大な貢献をしました。今日、ソ連は共産主義建設を全面的に展開する歴史的な時期に入つています。フルシチョフ同志をはじめとするソ連共産党中央とソ連政府の指導のもとに、ソ連の経済建設は輝かしい成果をおさめ、科学・技術は飛躍的な発展をとげています。ソ連は世界最初の人工衛星と宇宙ロケツトを打ち上げ、人類の自然征服に新しい紀元をひらきました。こうした偉大な成果は、帝国主義に反対し、民族の解放と人民民主主義、社会主義をめざし、世界の恒久平和をめざす全世界人民の闘争を大きく励ましています。

レーニンの一生は、偉大なプロレタリア革命家の一生であり、帝国主義、さまざまな反動派、日和見主義者とのはげしい闘いの中ですごされました。レーニン主義は、帝国主義との闘いの中で発展し、日和見主義

との闘いの中で発展してきました。レーニン主義の特質、レーニン主義の精髄は、ほかでもなくそのプロレタリア的な、徹底的な革命性にあるのであります。レーニン主義は、第二インタナショナルの修正主義者の手によつて去勢されたマルクス主義の革命的内容とすりへらされたマルクス主義の革命的鋭鋒を完全に復活したばかりでなく、さらに新しい歴史的条件のもとで、新しい歴史的経験にもとづいて、いつそうマルクス主義の革命的内容を発展させ、マルクス主義の革命的鋭鋒を発揚しました。

十九世紀の末、資本主義は新しい段階、すなわち独占資本主義の段階、つまり帝国主義の段階へと発展しました。この段階に入つてから、資本主義のあらゆる矛盾はさらにいつそう、さらにあますところなく、さらに全面的に暴露されました。かくして、資本主義のこの新しい段階にたいして新しい分析をおこなうという新たな任務がマルクス主義者に提起されました。この任務を遂行したのは、ほかでもなく、まさに偉大なレーニンその人でありました。

レーニンは、帝国主義の本質をふかく分析し、労働者階級の裏切り者であるベルンシユタイン、カウツキーといつた輩が帝国主義のためにおこなつた粉飾と弁護に徹底的な反駁をくわえました。レーニンは、帝国主義が、独占的な、腐れはてた、瀕死の資本主義であり、プロレタリア社会主義革命の前夜であることを科学的に論証しました。帝国主義時代においては、ブルジョアジーとその国のプロレタリアートとの間の矛盾、資本主義国相互間の矛盾、宗主国としての資本主義と植民地・半植民地との間の矛盾、これらの矛盾がいずれも未曽有に尖鋭化するところまで発展し、革命によつてのみこれらの矛盾は解決されうるのであります。帝国主義は、帝国主義相互間の戦争、植民地・半植民地を侵略するための戦争、国内のプロレタリアートと勤労大衆を弾圧するための戦争によつ

て、幾百幾千万の人びとを血の海に投じ、それによつて先に述べた一連の矛盾をとりのぞこうとたくらみます。しかし、帝国主義の願望に反して、帝国主義の反革命戦争は、けつして帝国主義の矛盾をとりのぞくことは出来ないばかりか、かえつてそれらの矛盾をさらに激化させ、革命の勃発をさらに促すのであります。

周知のように、レーニンは1917年のロシアの二月革命いご、かれのあの有名な「遠方からの手紙」の中で、ロシアの革命問題について述べ、当時、帝国主義的世界戦争が、全世界の歴史の流れを大々的にはやめ、かつてなかつたほどに深刻な世界的な、経済的、政治的、民族的および国際的危機を生み出し、また血と汚物にまみれたロシアのツアーリ制度の荷車を、このような世界史のとくに急激な転換に遭遇せしめて、一挙にくつがえす「全能の舞台監督」となつている①と指摘しました。

マルクス・レーニン主義者はいかなる場合においても、帝国主義制度に反対し、帝国主義戦争に反対するものであります。マルクス・レーニン主義者は、資本主義的帝国主義制度自身の矛盾が、プロレタリア革命と植民地・半植地の革命を必然的に、不可避的にひきおこすと考えます。第二インタナショナルの日和見主義者は、帝国主義の見せかけの「強大さ」に肝をつぶし、ブルジョアジーの買収に応じて、帝国主義に奉仕しました。かれらは帝国主義の利益にもとづいて、労働者大衆と人民大衆の間に、改良主義と投降主義の影響を撒布し、革命の道に反対しました。かれらは、帝国主義戦争が勃発した際に、帝国主義戦争を支持するという、恥ずべき立場に転落しました。日和見主義者とは反対に、レーニンは一貫してプロレタリア革命家の立場にたち、帝国主義戦争反対の最前線に立ちました。レーニンは、帝国主義の手先としての日和見主義者の

① 「遠方からの手紙」1917年3月7日「レーニン全集」（ロシア語版）第23巻 292～293ページ

面目をあばいて、帝国主義戦争にだんこ反対し、そして帝国主義戦争が勃発した際には、革命戦争によつて帝国主義戦争を終結させよ、と主張しました。**「社会主義制度こそ人類を戦争からぬけ出させる唯一のものである」**①とレーニンは指摘しました。

レーニン主義の革命的精神は、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁に関する学説のなかにとくにきわだつて表現されています。ブルジョア民主主義制度に粉飾をほどこし、プロタリアートの革命的精神を麻痺させるカウツキー輩の修正主義の「理論」を粉砕するために、レーニンは、プロレタリア革命がぜひともブルジョアジーの国家機関を打ち砕き、その代りにプロレタリアート独裁をうちたてなければならないことを繰りかえし指摘しました。**「ブルジョア国家にプロレタリア国家（プロレタリアート独裁）がとつてかわるのは、『自滅』の道を通じては不可能であり、それは、通例、暴力革命によつてのみ可能である。」「まさにこのようなことが、マルクスとエンゲルスの学説全体の基礎になつている。」**②とかれは述べています。レーニンはまた指摘しています。プロレタリアート独裁は、新しい条件下における階級闘争のことなつた形態による継続であり、搾取階級の反抗を鎮圧し、外部からの侵略に抵抗するために、旧い勢力とその伝統に反対するためにすすめられる断固たる闘いである。プロレタリアート独裁なくして、社会主義の勝利はない。プロレタリアート独裁は、ブルジョアジー独裁にくらべて、何百万倍も民主的な政治制度である、と。

レーニンは、マルクス主義の連続革命の思想を輝かしく運用し、発展

① 「スイス社会民主党内のツインメルバルド左派の任務」1916年10～11月「レーニン全集」（ロシア語版）第23巻 128ページ

② 「国家と革命」1917年8～9月「レーニン全集」（ロシア語版）第25巻 372ページ

させて、それをプロレタリア革命の根本的な指導方針としています。レーニンは、プロレタリアートがブルジョア民主主義革命のなかで指導権を獲得し、ブルジョア民主主義革命を、停滞させることなく社会主義革命へとただちに転化させるべきだという原理を提起しました。レーニンはまた、社会主義革命がけつして最終目的ではなく、なおひきつづき前進して、共産主義の高い段階へと移行していかなければならないことを指摘しています。**「社会主義的改造をはじめるにあたつて、われわれは、これらの改造がめざしている終局の目標、すなわち、共産主義社会をつくりだすという目標を、はつきりと自分に提出しなければならない」**①とレーニンは述べています。

レーニンは資本主義の経済、政治の発展の不均衡という絶対的な法則にもとづいて、社会主義がまず一つもしくはいくつかの国において勝利をおさめるという結論をひきだしました。一つもしくはいくつかの国における社会主義の勝利から、全世界各国において社会主義が勝利をおさめるにいたるまでには、一つの歴史的時代がそつくりふくまれることになるでありましよう。レーニンは世界革命の前途にたいしてゆるぎない確信をもつており、その最後の論文「量はすくなくても、質のよいものを」の中で次のように述べています。**「闘争の結果は、結局のところ、ロシア、インド、中国などが、世界人口の圧倒的多数を占めていることにかかつている。ところがまさにこの多数の人が、近年、異常な早さで、自己の解放をめざす闘争に引きいれられており、したがつて、この意味では、世界的闘争の問題の終局的な解決がどうなるかについては、いささかの疑問もあつてはならない。この意味では、社会主義の終局的な勝**

① ロシア共産党（ボ）第七回大会における「綱領の改正と党名の変更についての報告」1918年3月8日「レーニン全集」（ロシア語版）第27巻 103ページ

利は、完全にまた無条件に保障されている。」①と。

資本主義制度はかならず滅亡し、社会主義と共産主義の制度が必然的にこれにとつて代るでありましよう。これは人間の意志によつては左右することのできない客観的な法則であります。レーニンはマルクス、エンゲルスの後をうけついで、この法則をさらにいつそう明らかにし、また人民大衆の革命的な創造精神をひじように高く評価しました。レーニンの指導した偉大な十月革命の勝利は、全人類に徹底的な解放の道を指し示し、社会主義と共産主義の輝かしい前途を指し示しました。まさに毛沢東同志の述べているように、「**ソ連の道、十月革命の道は、根本的にいつて、全人類発展の共通の輝く大道である**」②のであります。

中国革命は十月革命の継続であります。中国共産党と毛沢東同志は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を中国革命の具体的実践と結びつけました。そしてそれによつて、中国革命には正しい方向があたえられ、中国革命の面目は一新されたのであります。

毛沢東同志は、マルクス・レーニン主義の革命的精神を十分に発揚し、われわれの条件下において、マルクス・レーニン主義をまもり、マルクス・レーニン主義を発展させました。毛沢東同志の指し示した革命の道にそつて、わが党は中国革命を指導し、たえず勝利から勝利へ前進しています。

わが国の新民主主義革命は、プロレタリアートの指導する、人民大衆の、帝国主義、封建主義、官僚資本主義に反対する革命でありました。この革命の勝利は、二十数年の長きにわたる革命戦争を通じてはじめてかちとられたのであります。

---

① 「量はすくなくても、質のよいものを」1923年3月2日「レーニン全集」（ロシア語版）第33巻458ページ

② 「大十月社会主義革命四十周年祝賀のソ連最高ソビエト会議での講話」より 「社会主義教育課程の閲読文献集」第3編 60ページ参照

長期にわたる革命の過程において、帝国主義は中国人民の前にたちはだかる最大の敵であります。中国革命が勝利する以前には、中国はかつて世界のあらゆる帝国主義国家の圧迫と支配をうけてきました。中国革命が勝利して後には、アメリカ帝国主義はまた朝鮮民主主義人民共和国に武力攻撃をくわえて、わが国の安全をおびやかし、わが国の領土台湾を武力によつて占領するとともに、封鎖・禁輸の方法をとり、またいわゆる「民主的個人主義」を利用して、中国革命を消滅しようとたくらみました。中国共産党は、マルクス・レーニン主義の高度な革命精神によつて、もつとも広はんな人民大衆を動員し、帝国主義およびその下僕のまきちらす親米、崇米、恐米の心理を一掃し、断固として帝国主義およびその中国における手先と闘い、ついに中国における帝国主義の圧迫と支配をくつがえすとともに、われわれの革命の成果を確固として守りぬいています。

わが党は、かつてブルジョアジーの政党——国民党——と二回にわたつて合作し、二回にわたつて決裂しており、したがつてブルジョアジーとの連合と闘争という問題の上では、きわめて豊かな経験をつんでいます。わが党は、武装闘争について豊かな経験をもつているばかりでなく、また平和闘争についても豊かな経験をもつています。

中国共産党は、毛沢東同志の指導のもとに、レーニンが明らかにしているところの、ブルジョア民主主義革命のなかでプロレタリアートが指導権を握るという思想、プロレタリアートが農民大衆を指導して民主主義革命を徹底的にすすめるという思想、民主主義革命は農民戦争と土地革命であるという思想、および民主主義革命を社会主義革命に転化するという連続革命の思想を正しく、具体的に運用してきました。これらの思想は、われわれの革命のたえまない勝利に指導的な役割をはたしているのであります。

レーニンはわれわれに、闘争のなかで鋼のように鍛えあげられたプロレタリアートの革命的政党なくしては、強大な敵にうちかつことはできない。そしてこの党は、マルクス・レーニン主義を自己の思想的基礎とし、プロレタリアートの革命綱領をもち、広はんな勤労大衆と密接なつながりをもつていなければならない、と教えています。わが中国共産党は、まさにそうしたプロレタリアートの革命政党であります。わが党は、内外の強大な敵に反対する闘争のなかで、右翼日和見主義および「左」翼日和見主義に反対する闘争のなかで成熟してきたのであります。右翼日和見主義反対、「左」翼日和見主義反対のたび重なる闘争を経て、わが党ははじめて毛沢東同志をはじめとする党中央のマルクス・レーニン主義的な指導を確立したのであります。わが党が民主主義革命の時期に、プロレタリアートの指導権をしつかりとその手におさめ、それによつて民主主義革命の徹底的な勝利をかちとり、また民主主義革命の勝利を急速に社会主義革命の勝利へと転化することが出来たのは、まさにこうした指導があつたからにほかならないのであります。

右翼日和見主義および「左」翼日和見主義に反対するわが党の闘争のなかで、レーニンの「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」、「国家と革命」、「共産主義運動における『左翼』小児病」、「プロレタリア革命と背教者カウツキー」などの著作は、われわれのきわめて重要な思想的武器となつています。

わが党は、マルクス・レーニン主義の連続革命論と革命発展の段階論の学説を、中国革命の実践にあてはめ、わが国の民主主義革命から社会主義革命への転化の一連の問題を正しく具体的に解決してきました。レーニンは民主主義革命と社会主義革命との関係にふれたさい、**「前者は後者に転化する。後者は前者の諸問題をことのついでに解決する。後者は前者の事業を打ちかためる。後者がどれだけ前者を越えて成長することができるかは、闘争が、ただ闘争だけが決定する。」**①と指摘し、また**「民主主義革命が完全であればあるほど、この新しい闘争（社会主義革命を指す）は、それだけはやく、ひろく、純粋に、断固として展開されるであろう。」**②と述べています。わが国の状況は、民主主義革命が徹底すればするほど、社会主義革命はすみやかに、とどこおりなく展開されるし、社会主義革命が徹底的におこなわれればおこなわれるほど、社会主義建設もまたすみやかに、とどこおりなくすすむし、社会主義建設をはやめれば、またかならず共産主義の実現を促進するであろうということを完全に証明しています。

社会主義革命を徹底的にすすめるということは、つまり、われわれが経済戦線で社会主義革命の勝利をおさめるばかりでなく、さらに政治戦線、思想戦線で社会主義革命の勝利をおさめ、ブルジョアジーの政治的、思想的影響をたえず一掃し、社会主義建設の過程でうまれてくる生産関係と生産力との間の矛盾、上部構造と経済的基礎との間の矛盾をたえず解決してゆくということであります。こうすれば、大衆の革命的な創造精神を十分に動員し、社会主義建設のなかで、レーニンが述べているように**「住民の大多数が参加し、ないしは全住民が参加して行われる眞に大衆的な運動」**③を形成し、それによつて社会の生産力の躍進を大いに促すことができるでありましよう。

ある種の理論によれば、人類社会には、敵と味方の矛盾が存在するだけであつて、人民内部の矛盾は存在しない。社会主義社会では、生産関

---

① 「十月革命四周年によせて」1921年10月14日「レーニン全集」（ロシア語版）第33巻 32ページ

② 「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」1905年6～7月「レーニン全集」（ロシア語版）第9巻 109ページ

③ 「国家と革命」1917年8～9月「レーニン全集」（ロシア語版）第25巻 443ページ

係と生産力との間、上部構造と経済的基礎との間には、互いに適応しあう面だけ存在して、互いに矛盾しあう面は存在しない。社会主義建設は、技術にたよりさえすればよいのであつて、大衆にたよる必要はない。社会主義制度は、かためさえすればよいのであつて発展させる必要はなく、たとえ発展することが必要であり、共産主義へ前進することが必要だとしても、闘争を通じる必要はなく、質的な飛躍を経る必要はない。したがつて、人類社会の連続革命の過程は、ここまでで終る、と考えられています。これは哲学思想上から言うならば、形而上学的な観点であつて、唯物弁証法的な観点ではありません。

毛沢東同志の「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」という著作は、マルクス・レーニン主義の唯物弁証法をわが国の社会主義建設期に適用して、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾のけじめをはつきりさせる問題、人民内部の矛盾を正しく処理する問題、社会主義制度のもとにおける生産関係と生産力との間の、上部構造と経済的基礎との間の矛盾を正しく処理する問題を提起したものであります。このマルクス・レーニン主義の理論は、先に述べた形而上学的な観点とは根本的にことなつています。まさにこの理論を基礎とし、わが国の社会主義建設の実践の経験にもとづいて、わが党の大いに意気込み、つねに高い目標をめざし、おおく、はやく、立派に、むだなく社会主義を建設するという総路線が生まれたのであります。

わが党の社会主義建設の総路線にみちびかれて、わが国では、工業および農業の生産の大躍進が生まれ、農村と都市の人民公社が生まれ、技術革新と技術革命の運動が生まれ、教育と生産労働の結合が生まれ、商業、科学研究、文化芸術、医療衛生、体育など各分野における大躍進が生まれているのであります。

わが党の社会主義建設の総路線は、帝国主義者と現代修正主義者の攻

撃をうけているばかりでなく、さらに若干の凡俗な者からいわゆる「小ブルジョアジーの熱狂性」だと中傷されています。しかし、事実はあくまでも事実であります。われわれのこの社会主義建設の総路線は、マルクス・レーニン主義の総路線であります。この総路線にみちびかれて、わが国の社会主義建設事業の発展によつて、わが国の各分野の姿は急速にあらためられつつあります。

「国家と革命」その他の著作のなかで、レーニンは社会主義社会の過渡的性質を分析しています。レーニンは、社会主義は経済的、政治的、思想的にまだ資本主義の伝統あるいは痕跡から完全には脱けきれていないこと、それはまだ完全な、成熟した共産主義社会ではないこと、それは共産主義の低い段階にすぎないのであつて、さらに共産主義の高い段階、完全な、成熟した共産主義へ移行しなければならないことを指摘しています。レーニンのこうした思想は、われわれにとつてきわめて重要な意義をもつています。われわれは共産主義者である以上、かならずマルクス・レーニン主義の連続革命論と革命発展の段階論の原理にもとづいて、社会主義建設をすすめる中で、積極的に共産主義を実現するための条件を生み出してゆかなければなりません。中国共産党中央は、わが国で将来共産主義を実現するために必要な条件を次のように指摘しています。すなわち、「**社会の生産物がきわめてゆたかになり、人民全体の共産主義的自覚と道徳的品性が大いに高まり、人民全体の教育が普及、向上し、社会主義の時期にはまだ残さざるをえなかつた旧社会からの遺物である労働者と農民との差異、都市と農村との差異、頭脳労働と肉体労働との差異がしだいになくなり、こうした差異のあらわれである不平等なブルジョア的権利の残余もしだいになくなり、国家の機能がただ外敵の侵略に対処するだけで、内部にたいしてはもはや作用をはたさないようになれば、このとき、わが国の社会は、各人がその能力に応じてはたら**

き、必要に応じて分配を受ける共産主義の時代にはいることになるであろう」①と言うのであります。

新民主主義革命、社会主義革命および社会主義建設の中におけるわが国人民のすべての勝利は、毛沢東同志をはじめとする中国共産党の指導のもとに、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の具体的実践の結びついた毛沢東思想の指導のもとにおさめられたものであります。われわれは偉大なソ連共産党、ソ連政府、ソ連人民の援助、すべての社会主義国の援助、世界各国の共産党、労働者党、勤労大衆および進歩的な人びとの援助を得ています。こうした偉大な国際主義の精神を、中国人民は永遠に忘れることは出来ません。

われわれは今日まさに、帝国主義制度がいつそう急速に崩壊してゆき、全世界人民の勝利と覚醒がたえず発展する偉大な、新しい時代におかれています。

こうした情勢にたいして、マルクス・レーニン主義者は現代修正主義者と根本的にことなる立場、観点から出発して、根本的にことなる結論をひき出しています。マルクス・レーニン主義者は、これは世界各国のプロレタリア革命にとつて空前に有利な新しい時代であり、植民地・半植民地の民族革命にとつて空前に有利な新しい時代である、平和の力はすでに大きな成長をとげ、戦争を防止する実際的な可能性が生まれている、全世界の人民は、帝国主義との闘争をさらにいつそう強化して、革命の発展をうながし、世界の平和をまもらなければならない、というふうに考えています。ところが、現代修正主義者は、これは各国のプロレタリア革命と植民地・半植民地の民族革命がすでに世界の議事日程から消え去つた「新しい時代」であると考えています。そしてかれらは、革

① 「中国共産党中央委員会の農村に人民公社をつくる問題についての決議」1958年8月

命を経なくとも、帝国主義は自らすすんで歴史の舞台からひき下がつてゆくであろう、反帝闘争をおこなわなくとも、恒久平和は自然におとずれるであろうと考えています。かくして、革命を要求するか否か、帝国主義に反対することを要求するか否か、これがマルクス・レーニン主義者と現代修正主義者との根本的なわかれ目となつています。

現代修正主義者は、新しい時代の歴史的な条件の下においては、レーニンの帝国主義にたいする分析は「時代おくれのもの」となつており、帝国主義の本性は「すでに変つており」、帝国主義は戦争政策と侵略政策を「すでに放棄している」ということをその主たる論拠として、革命的なマルクス・レーニン主義を改竄し、去勢し、裏切つているのであります。かれらはいわゆる「教条主義的にではなく、歴史的に」レーニンの理論的遺産に対すべきであるということを口実に、マルクス・レーニン主義の革命的内容と革命的精神に攻撃をあびせています。

東風が西風を圧倒し、社会主義と平和の力が帝国主義の戦争勢力にたいして優勢を占めている条件の下で、帝国主義の内部には多くの困難があり、かれらはますます窮地におちいつています。帝国主義者は自己の滅亡を挽回しようと、あらゆる手だてをつくしてあがきつづけています。さいきん、帝国主義者、ことにアメリカ帝国主義者は、かれらの侵略と略奪の政策を遂行し、世界の人民を麻痺させるために、ある種のさらに狡猾な、さらに欺瞞的な戦術をとろうと努めています。アメリカ帝国主義でさえも、時にはかれらがさらに「柔軟性」にとんだ戦術なるものをとろうとしていることを決して隠そうとはしていません。かれらはさまざまな手段を用いて、戦争的手法と平和的手法をかわるがわる用いています。かれらは、一方では軍備拡張と戦争準備にさかんに拍車をかけ、核戦争による恐喝をおこない、また他方では「平和」の煙幕を張り、飴にくるんだ砲弾をもちいて、帝国主義がさも平和を主張している

かのように見せかけようとしています。かれらは革命運動にたいして残酷な弾圧手段をとる一方、また他方では欺瞞と買収をおこなつて、革命運動を軟化させ、分裂させようとたくらんでいます。帝国主義者がそうした欺瞞の手をつかつているのは、かれらの略奪と侵略の本質をおおいかくし、かれらの戦争準備の段取りをおおいかくして、各国の革命運動と植民地・半植民地の革命運動を瓦解させ、諸国民の世界平和をめざす闘争を瓦解させ、諸国民を奴隷化し、社会主義国を転覆させるという目的を達成するがためにほかなりません。

人民に反対する帝国主義のさまざまな手法に対処するためには、全世界各国の人民も、帝国主義に反対する闘争のなかで、さまざまな革命闘争の手段と方法を運用しなければなりません。マルクス・レーニン主義者は、従来から一貫して次のように考えています。革命闘争の中では、原則のきびしさを保持すると同時に、戦術上で弾力性をもたなければなりません。非合法と「合法」、議会外と議会内、流血と無血、経済的と政治的、軍事的と思想的等々、これらすべてをふくめたさまざまな革命の手段と闘争形態は、すべて帝国主義をいつそう十分に暴露し、帝国主義の侵略的な面目をあばきだし、たえず人民の革命的自覚を高め、人民大衆をより広はんに動員して帝国主義と反動派への反対に起ち上がらせ、世界平和をめざす闘争を発展させ、人民革命と民族革命の勝利を準備し、これを獲得するためのものであります。

マルクス・レーニン主義者はまた、従来から一貫して、次のように考えています。プロレタリアートが革命の勝利をうるためには、自己の予備軍と連合しなければなりません。農民とその他の勤労大衆および植民地・半植民地の広はんな被圧迫人民は、プロレタリアートの基本的同盟軍であり、プロレタリアートはかれらと強固な同盟をむすぶべきでありますが、このほか、それぞれ異なつた時期によつて、さまざまな結集しうる人びとを結集すべきであります。もちろん、プロレタリアートはまた、人民の利益のためには、たとえそれが一時的な、部分的な矛盾であつたとしても、帝国主義相互間の矛盾を十分に利用すべきであります。これらすべては、帝国主義と反動派をうちたおすためのものであります。

帝国主義および帝国主義の侵略政策との闘争のなかで、もしその可能性がありさえすれば、社会主義国が帝国主義国と平和な話合いや相互訪問をおこない、戦争の方法によつてではなく平和な方法で国際間の紛争を解決し、平和共存の協定または相互不可侵条約を結ぶよう努力することは完全に許されるし、また必要なことであつて、諸国民にとつて有利なことであります。

ソ連政府は国際緊張を緩和し、世界の平和をまもるために、大きな努力をはらつています。中国共産党と中国政府および中国人民は、東西首脳会談の開催および全面的な軍縮、核兵器の禁止などに関するフルシチョフ同志をはじめとするソ連政府のだした平和提案を積極的に支持するものであります。

現代修正主義者はまつたく、マルクス・レーニン主義の革命的精神にそむき、全世界の人民の利益にそむいて、ブルジョアジーと帝国主義に屈服し、降伏しています。かれらは、帝国主義の本性がすでに変つており、帝国主義はその戦争政策を自らすすんで放棄しているとし、したがつて、反帝闘争も必要でなければ、革命も必要でないというふうに考えています。かれらはアメリカ帝国主義の侵略政策と戦争政策を極力おおいかくし、帝国主義とアメリカ帝国主義の頭目アイゼンハワーを美しくみせかけようとしています。かれらの口にかかると、アイゼンハワーも「平和の使者」となり、アメリカ帝国主義はすでに平和の敵でなくなり、植民地・半植民地の民族解放運動の敵でなくなり、全世界人民のも

つとも凶悪な敵でなくなつていると言うことになります。つまるところ、現代修正主義者に言わせれば、帝国主義はすでに社会主義とほとんど何の違いもなく、もし帝国主義との闘争を堅持し、革命を堅持しようと言う者があれば、それは平和をさまたげ、平和共存をさまたげるものであり、「生硬な教条主義」だと言うことになるのであります。

われわれマルクス・レーニン主義者は、教条主義とはどういうものかをよく知つており、またたえず教条主義と闘つています。わが中国共産党は、教条主義との闘争の問題では、豊かな経験をもつています。教条主義者は革命をおこなう気はありますが、かれらはマルクス・レーニン主義の普遍的な真理を、自国の革命の具体的な実践と結びつけることをわきまえておらず、敵の具体的な矛盾を利用することをわきまえておらず、力を集中してもつとも主要な敵に反対することをわきまえておらず、さまざまな中間勢力と適宜に連合してゆくことをわきまえておらず、闘争の戦術と方法を弾力性をもつて運用することをわきまえておらず、その結果、プロレタリアートを孤軍奮闘の状態におとしいれるのであります。こうした教条主義は、革命にとつて不利であり、したがつてわれわれはそれに反対しなければなりません。われわれが教条主義に反対するのは、革命を推進し、敵を打倒するためであります。現代修正主義者は、われわれとはまつたく反対であり、かれらは「教条主義」に反対するということを口実に革命に反対し、革命を取り消し、マルクス・レーニン主義を曲解し、ふみにじろうとたくらんでいるのであります。まさにレーニンの言つているとおり、「**かれらは学説の革命的な側面、その革命的な精神をわすれ、抹殺し、歪曲している。そして、ブルジョアジーにうけいれられるもの、あるいはうけいれられるように見えるものを、前面におしだし、礼讃している。**」①のであります。現代修正主義者はマルクス・レーニン主義を「教条主義」だと言つて中傷していま

すが、これこそ労働者階級の裏切り者がマルクス・レーニン主義の革命的な魂を蝕む卑劣な手口であります。

革命はマルクス・レーニン主義の魂であります。マルクス、エンゲルスは全世界のプロレタリアートに、資本主義制度を消滅し、全人類を解放するという偉大な歴史的使命を提起しました。レーニンは、新しい歴史的条件のもとで、炎のような革命闘争に身を投ずるよう全世界のプロレタリアートとすべての被圧迫人民をよび起こしました。マルクス・レーニン主義はプロレタリアートの革命闘争の中から生まれ、またプロレタリアートの革命闘争の中でたえず発展してきました。一部の個別的な問題にたいするマルクス・レーニン主義の提起のしかたは、時間の推移と状況の変化にともなつて、いくらかあらためられることもありましよう。しかし、マルクス・レーニン主義の革命的な精神は絶対に変わることはありません。レーニンは当時の歴史的な条件にもとづいて、マルクス、エンゲルスの個別的な問題にたいする提起のしかたをあらため、また、マルクス、エンゲルスが生前提起することのできなかつた問題を提起しましたが、こうした変更によつて、マルクス主義の革命的な精神をいささかも弱めなかつたばかりか、マルクス主義の革命的な戦闘力をいつそう強めています。革命は歴史の機関車であり、人類社会の進歩の動力であります。階級社会においてもそうであり、未来の共産主義社会においてもそうであつて、ただその時の革命は、性質と方法がことなるにすぎません。

アメリカ帝国主義こそ、各国の人民革命と民族解放運動および世界平和のもつとも凶悪な、もつとも狡猾な敵であり、そしてアイゼンハワーが現在アメリカ帝国主義の首脳であることはわれわれが知つているとお

前ページ ① 「国家と革命」1917年8～9月「レーニン全集」（ロシア語版）第25巻 357ページ

りであります。アメリカ帝国主義が全世界人民のもつとも凶悪な敵であり、憲兵の役を演じていることは、レーニンが早くから指摘していたところであります。今日、アメリカ帝国主義は、なおさらのことみずから世界の憲兵をもつて任じ、いたるところで革命を扼殺し、民族解放運動と資本主義国のプロレタリアートの革命闘争を弾圧し、世界人民の平和をめざす運動を破壊しています。アメリカ帝国主義は、時々刻々、社会主義国を転覆させ、消滅しようとたくらんでいるばかりでなく、反共反社会主義のかくれみのにかくれて、極力中間地帯にむかつて拡張をすすめ、世界制霸を夢みています。アメリカ帝国主義のこうした侵略政策と戦争政策は、今日にいたるまでけつして改められてはいません。アメリカ帝国主義がいつどんな欺瞞的な戦術をとろうとも、その侵略的、略奪的本性は死ぬまで変わりません。アメリカ帝国主義は国際帝国主義の最後の支柱であります。資本主義諸国のプロレタリアートが解放をかちとり、植民地・半植民地の人民が民族の解放をかちとり、全世界人民が世界平和をまもるためには、かならず闘争の鋒先をアメリカ帝国主義に向けなければなりません。帝国主義、ことにアメリカ帝国主義を暴露する勇気があるかどうか、かれらと闘う勇気があるかどうかは、はたして人民革命をおこなおうとする気構えがあるのかどうか、被圧迫民族の徹底的な解放をかちとろうとする気構えがあるのかどうか、真の世界平和をかちとろうとする気構えがあるのかどうかをためす試金石であります。

アメリカ帝国主義の侵略政策に反対するためには、全世界のすべての革命勢力、すべての平和愛好勢力を連合しなければなりません。社会主義諸国の人民の闘争、植民地・半植民地の人民の民族解放闘争、資本主義諸国のプロレタリアートの革命闘争、諸国人民の平和のための闘争を一つに結びつけ、強大な反帝国主義戦線を結成し、アメリカ帝国主義の

侵略政策と戦争政策にだんこたる打撃をあたえてのみ、世界の平和をいつそう有効にまもることができるのであります。ソ連をはじめとする社会主義陣営は、世界の平和を守る主力であります。植民地・半植民地の人民の民族解放闘争、資本主義国のプロレタリアートと勤労大衆の革命闘争は、同様に世界の平和をまもる偉大な力であります。植民地・半植民地の民族解放闘争および資本主義国のプロレタリアートと勤労大衆の革命闘争からはなれると、世界平和をまもる力は大いに弱められ、帝国主義にとつて有利となるでありましよう。

植民地・半植民地の人民が革命にたち上がり、かれらの体をしばりつけている鎖を打ち砕くことは、いかなる力をもつてしてもはばむことはできないし、束縛することはできません。かれらの革命闘争は帝国主義制度を根本からゆりうごかす役割をはたしております。すべての革命的なマルクス・レーニン主義者は、こうした正義の闘争を無条件に、断固として支持すべきであります。資本主義国のプロレタリアートと勤労大衆が革命にたち上がり、独占資本の反動的支配をくつがえすことも同様にまたいかなる力をもつてしてもはばむことはできないし、束縛することはできません。かれらの革命闘争は、侵略戦争をひきおこそうとする帝国主義の手足を縛り上げることができるのであります。すべての革命的なマルクス・レーニン主義者は、同様にこの正義の革命闘争を無条件に、断固として支持すべきであります。この二つの闘争を断固として支持することは、言いかえれば世界平和をまもる闘争を大いに強めることになるのであります。社会主義国のプロレタリアートは、資本主義が全世界において滅亡し、社会主義が全世界において勝利するその日まで、全世界のプロレタリアートと被圧迫民族の勤労大衆の援助のもとに、プロレタリア革命がすでにかくとくした勝利の成果をまもらなければならないと同時に、各国のプロレタリアートの革命事業を支持してたえず前

進発展させ、帝国主義の力をたえず弱めてゆかねばならないとレーニンは考えていました。レーニン主義者たるものはレーニンのこれらの基本的な論点をいつも心にとめておかなければなりません。

現代修正主義者は帝国主義政策の産物であります。現代修正主義者は帝国主義の核戦争による恐喝政策に肝をつぶしたのであります。かれらは戦争への恐怖からさらに革命をおそれ、自分が革命をやろうとしないところから人の革命にまで反対しているのであります。かれらは帝国主義の必要にこたえて、各国の民族解放運動と各国のプロレタリア革命運動の発展をさまたげようとしています。帝国主義は社会主義国家を資本主義国家に変質させようとたくらんでいますが、チトーのような現代修正主義者は、まさに帝国主義のこうした必要にこたえたものであります。

現代修正主義に反対することが重要であるのは、現代修正主義者が労働者大衆と勤労大衆の間で、ブルジョアジーや社会民主党の右翼にははたせない役割をはたしうるからであります。かれらは帝国主義の代理人であり、各国のプロレタリアートと勤労大衆の敵であります。

1957年11月にモスクワでひらかれた社会主義諸国の共産党・労働者党代表者会議の宣言は、当面の情勢の下でマルクス・レーニン主義をまもることの必要性を指摘しました。

宣言は次のように指摘しています。「**帝国主義ブルジョアジーは、思想的に大衆を蝕み、社会主義を歪曲し、マルクス・レーニン主義を中傷して、大衆をまどわせ、混乱させようとやつきになつている。したがつて、大衆にたいするマルクス・レーニン主義の教育を強化し、ブルジョア思想と闘い、社会主義制度と共産主義運動に関する帝国主義のデマや中傷をバクロし、社会主義思想と諸国人民間の平和、友好を生き生きとした、説得力のある形式で広く宣伝することは、第一義的な意義をもつ**

ている。」と。

宣言はまた次のようにのべています。「**現代修正主義は、マルクス・レーニン主義の偉大な学説を誹謗しようとし、マルクス・レーニン主義が『時代おくれ』のものであり、今日では社会の発展にたいしてすでに意義を失つているかのようにのべたてている。修正主義者はマルクス主義の革命的な魂を蝕み、労働者階級と勤労大衆の社会主義にたいする確信を極力うちこわそうとたくらんでいる。かれらは資本主義から社会主義への移行の時期にプロレタリア革命とプロレタリアート独裁を行う歴史的な必要性を否定し、マルクス・レーニン主義政党の指導的役割を否定し、プロレタリア国際主義の原則を否定し、党の建設に関するレーニン主義の基本原則の放棄を要求し、何よりもまず民主集中制の放棄を要求し、共産党を戦闘的な革命組織からはてしない論争をやるある種のクラブにかえることを要求している。**」と。

現代修正主義は、当面の国際共産主義運動のなかにおける主要な危険であります。レーニンの革命的な精神を高度に発揚し、帝国主義の代理人——現代修正主義の本当の姿を徹底的に暴露することは、われわれの神聖な責任であります。

モスクワ宣言は、各国の共産党、労働者党によつて公認された当代の国際共産主義運動の綱領であります。わが中国共産党は、各国の共産党、労働者党とともに、この偉大な綱領を忠実にまもり、遂行するものであります。

共産主義運動ははじめから国際的な運動でありました。プロレタリアートの国際連帯は、世界各国人民の革命事業の勝利の根本的な保証であり、被圧迫諸民族の民族解放事業の勝利の根本的な保証であり、世界の平和をめざす諸国人民の勝利の根本的な保証であります。社会主義諸国の利益のため、各国のプロレタリアートと勤労大衆の利益のため、被圧

迫民族の解放のため、世界平和をまもるために、われわれはプロレタリアートの国際連帯をつねに強めてゆかなければなりません。マルクス・レーニン主義者は、これまでずつと自分の瞳をまもるように、ソ連をはじめとする社会主義陣営の団結をまもり、国際共産主義の隊列の団結をまもり、全世界のプロレタリアートの団結をまもり、全世界人民の団結をまもつて来ました。帝国主義者と現代修正主義者は、この偉大な国際連帯を、かれらが各国の革命運動をきりくずすうえでの最大の障害と見なしています。かれらはなんとかしてこうした団結を破壊しようと夢み、もつとも恥知らずな挑発離間やデマ・中傷などの手口にうつたえています。しかし、こうした卑劣な陰謀は、かならず徹底的な破産のうき目をみるにちがいありません。

マルクス・レーニン主義の革命的な学説にみちびかれ、プロレタリアートの社会主義事業は、かならず全世界で徹底的な勝利をおさめるでありましようし、かならず全世界で徹底的な勝利をおさめることができるのであります。恒久平和はかならずこの世におとずれるでありましよう。

われわれは偉大なレーニンの革命の旗じるしのもとに、団結して、勇往邁進いたしましよう！

マルクス・レーニン主義万歳！

レーニン主義万歳

1960年4月 初版発行

出版者 外文出版社
中華人民共和国
北京阜成門外百万莊

編号：(日)3050—332